し英國に不利多し。是より英國人一樣に日本貿易を志し來る。【九三】

弘化二乙巳**年**　西暦1845年　支那道光廿五年

正月廿二日　高橋小太郎再出仕。【八五】

嘉永五壬子**年**　西暦1852年　支那咸豐二年

十一月　錢屋五兵衛獄中に死す。【一〇四】

其二　人物概覽

【ア行】

ア

麻田剛立

名は安彰、正庵また璋庵と號す。剛立は其字なり。豐後杵築藩儒綾部絅齋の第二子なり。享保十九年二月生る。稟性穎悟にして最も天文曆星の學を好み、又醫術を喜び獨學勉勵廿四年、大に其の法に通ぜしが明和八年、年三十八にして藩を脱し大阪に出で中井竹山履軒の兄弟に頼り氏を麻田と改む。是より醫を業とし、益〻心を星學に潛め、夜間枕に就かざること九年に及ぶといふ。後遂に其學を大成し精確合はざるなし。泰西の書舶載せらるゝに及び之に對比するに符節を合する如かりしといふ。寛政十一年五月死す。年六十六。【七七】

足代弘訓

幼字は慶二郎、後式部また權太夫と稱し、寛居と號す。伊勢山田足代弘早の子。天明四年十一月生る。寛政二年十七歳にして父の後を嗣ぎ神主となる。後荒木田久老、本居太平、同春村等に學び、又京都及び江戸に出で諸縉紳諸名士に就き開見を廣くす。天保中勅により宮中に召され國史を講じ、又諮詢に答ふるところあり、ついで六國史人名部類若干卷を撰して獻上す。晩年洋舶の來るや博く圖書舊史に考へ從遊の士に告げて稽ふところを知らしむること多し。安政三年十一月五日死。年七十三。著書寛居雜纂、度會系圖、同考證等

あり。【三七】

脇部良弼　能登守、山城守、伊賀守、又遠江守、甲斐守と稱す。文政十三年使番より駿府町奉行となり大膳と稱す。後堺奉行を經、天保七年四月大坂町奉行となり、十年六月付に移る。ついで勘定奉行公事方となり、十五年九月江戸町奉行となる。其後小性組番頭留守居、大目付海防掛、町奉行、清水附支配、留守居、側衆留守居兼帶等を經、文久三年七月側用取次となり、元治元年六月免職。同年十一月留守居上席となり、慶應三年八月側衆格となる。同四年二月若年寄となり三月辭す。墓は東京青山玉窓寺にあり。【四〇、四二、四三、四六、五〇、五一、五八、五九、六〇、六一】

荒木玄蕃　出石仙石氏の臣、藩中隨一の舊家にして本高千七百石を知行す。天保八年仙石左京一件の際年三十四、左京の爲に禁獄せられしことあり。遂に此の爲連坐して知行を召上げらる。【一三、一四、一五】

青木研藏　周弼の弟、秋溪と號す。少より才氣あり、兄に從ひて長崎に赴きシーボルトの教を受け、後江戸に遊びて伊東玄朴の象先塾にありて傍ら生徒を監督し、緒方洪庵、大石良英と併び稱せらる。後鄉里に歸り兄の後を嗣ぎて長州藩の侍醫兼好生館教授となる。弘化二年十月外國及び諸藩の事情探索の爲長崎に出張を命ぜられ、明治の初年政府に召されて主計大允となり、ついで大典醫に任ぜらる。幾もなくして東京越中島にて海嘯に死す。年五十六。【八二】

青木周弼　名は邦彥、月橋と號す。周防大島郡の人、父は玄棟。代々醫を業とす。少にして長州藩醫能美佑庵の門に學び、後長崎に至りシーボルトに就き蘭學及び蘭法醫學を修む。ついで江戸に出で坪井誠軒の塾に居り、又宇田川榕菴の門に入りて學び、遂に大成して長崎に赴き診療に從事し名聲大に揚る。天保九年六月藩侯の召に應じ萩に至り醫員となり二十五石を賜はる。同十三年建言して醫學教授所を設け好生館と名づく。嘉永三年六月侍醫に擢でられ祿百石を賜へらる。文久二年十二月死。年五十六。著書醫院類案、察病論、袖珍內外方叢、病理論等あり。明治三十六年十一月從四位を贈らる。【八二】

井伊右京亮　名は直經、井伊直政の長子直勝の子孫なり。越後與板二萬石を領して城主格たり。天保大盥の變大坂小口屋小番たり。【五八、六二】

石井宗謙　美作眞庭郡且土村の人。父信稱、十五歲の時父に別れ、十七歲より學に志し、後長崎に赴きシーボルトに從ひ學ぶ。學成り鄉に歸りて醫を業とす。天保三年勝山藩に召出され、十人扶持を賜はり侍醫となる。ついで備前岡山に開業す。間もなく擢んでられ幕府の侍醫となり、嘉永五年家を弟に讓り江戸に移り愛宕下藥師小路に住す。文久元年五月死。年六十六。【八二】

石坂宗哲　名は永敎、字は廷玉また文和、竿齋と號す。甲府の人、鍼灸の術に精しく、兼ねて物產學に通ず。寛政中德

川幕府に召されて奥醫師となり、晩年法眼に叙せらる。寛政八年甲府に歸り翌年醫學所を建て、居ること五年、同十二年江戸に還る。文化の初年より西洋醫學に基き人身の解剖を穿鑿し、和漢の鍼灸書を讀み發明するところ少からず。文政二年會津侯に人參數十種を請ひ得て朝鮮人の祕法により製したるに臭味形狀ともに原產に異ならざりしといふ。天保の末年頃に致仕して七十餘歲にして死す。【八二】

伊藤圭介

名古屋の人西山玄道の子。享和三年正月生る。後舊姓を取りて伊藤と改む。幼より植物を弄ぶを好み父兄に從つて家學を受くるの傍ら水谷豐文に從ひて本草學を修め、文政三年十八歲にして水谷氏と共に參尾の間に植物を採集す。文政四年京都に出で蘐林晋山に蘭學を學ぶ。十年三月博物會を名古屋修業堂に開く。九月長崎に至りてシーボルトの門に入る。安政六年尾張侯に徵されて寄合醫師となり、又洋學譯譯教授となる。後明治政府に召され大學少教授兼編輯權助より教授となる。三十四年男爵を授けられ勳三等に叙せらる。その正月死。年九十九。【八二】

伊東玄朴

名は淵、字は伯壽、沖齋また長翁と號す。肥前神崎郡の人、執行重助の子。十六歲にして醫に志し初め漢方を修め文政五年二十三歲にして佐賀に赴き島本龍嶺に從ひて蘭方を修め、ついで長崎に出で猪俣傳右衛門に從ひ蘭語を學ぶ。後江戸に出で雉を下して蘭書を教へ、天保二年佐賀

侯に徵され仕へ、十四年御匙醫となり、弘化四年御側醫に進む。安政三年同人とばかりお玉が池に種痘所を設く。五年幕府に召されて醫官となる。萬延元年法橋に叙せられ、文久元年法印となり、元治元年寄合醫師を命ぜらる。明治元年後横濱に居り四年一月死。年七十二。大正四年從四位を贈らる。【八二】

稲部市五郎

名は種昌、和蘭通詞たり。シーボルト渡來の時小通詞末席たり。シーボルトの爲に周旋盡力せしこと少なからず。後シーボルトの獄起るや、上州七日市の前田家に預けられ拘囚せらる。後十年天保十一年八月死。年五十五。富岡の金剛院に葬る。【八三、八六】

井上正甫

遠州濱松城主、正定の嗣。文化十四年九月陸奥棚倉に移封せらる。【三】

伊能忠敬

字は子齊、東河と號し、三郎右衛門又は勘解由と稱す。神保貞恒の第三子にして上總武射郡小堤村の人。後出でゝ下總香取郡佐原町の人伊能長由の嗣となる。壯より學を好み寛政六年家を子景敬に讓り江戸に出て高橋東岡の門に入り、西洋曆法を學び得るところ多し。寛政十二年閏四月北陸道及び蝦夷地方東南の沿岸を測量し、後各地に及び文化元年、同十二年數度に閏なりて進呈す。文政四年九月死。年七十七。江戸下谷清島町源空寺に葬る。明治十六年正四位を贈らる。【八四】

岩田靜馬

出石仙石氏の臣。年寄となる。天保八年左京一件に關與し罪を得、死罪に處せらる。時に年四十五。其の子

虎太郎又遠島に處せらる。【一六、一七、一八】

岩田丹太夫　出石仙石氏の臣、旗奉行、郡奉行兼帶勘定奉行たり。天保八年、左京一件に關與し、中追放に處せらる。時に年五十八。【一六、一七、一八】

今井官之助
今井克復　克復に同じ。【五三、六六】大阪天滿組惣年寄、通稱官之助。大鹽亂の際消防人足を率ゐて東番所に至り警戒し、又大鹽逮捕の際も同じく人足を率ゐて附近の警戒に任ぜり。【五七、六八、七三、七四、七五】

ウ

宇田川榕菴　名は榕、美濃大垣の人、江澤養樹の子。宇田川榛齋の養子となり、其氏を冒し津山藩の侍醫となる。長じて蘭學を馬場佐十郎に受く。文政五年西說菩多尼訶經を作り初めてリンネの植物綱目を我國に紹介す。九年德川幕府に召されて天文臺の譯譯局譯員となる。天保四年植學啓原を出し、同十年舍密開宗を出す。弘化三年六月江戸鍛冶橋松平家邸内に死す。年四十九。【八二】

内山彦次郎　大阪西組與力、大鹽逮捕に功あり。大阪箱館産物會所掛役人となり、元治元年五月天神橋上に暗殺せらる。【四六、六六】

宇津木靜區
宇津木矩之允　矩之允に同じ。【五四】宇は共甫、通稱俵二また矩之允、靜區と號す。彦根藩老臣宇津木下總の弟。天保五年大鹽平八郎の門に入り後長崎に遊ぶ。大鹽擧兵の當日殺害に遭ふ。時に年二十九。其詩稿を浪逆小草といふ。實弟岡本黃石の編なり。【五四、五五、五六、五七】

宇津木靖
宇津木兵太　矩之允に同じ。【五四】矩之允に同じ。【五五】

エ、ヱ

遠藤但馬守　名は胤統、近江野洲郡一萬石を領す。大阪御定番となり大鹽の亂鎭定に功あり賞せらる。【五八、六〇】

オ、ヲ

小笠原忠雄　忠眞の子。正保四年小倉に生る。寛文三年十二月從五位下遠江守に叙任し、七年十二月遺跡を嗣ぐ。ついで從四位下に叙す。享保二年漂著唐船を追ひ、又私貿易人を捕へて賞せらる。五年六月唐船乘組人三人を捕へ、又賞せらる。十年六月小倉に死す。年七十九。【一二】

岡本花亭　名は成、字は子省、忠次郎と稱す。花亭また豐洲、醒翁、詩癡、括囊道人等の號あり。少にして計吏となり、矢部定謙、川路聖謨、羽倉用九等と親み善し。文政の初年建議して惡弊を矯正せんとし却つて黜けられて小普請となる。天保八年水野忠邦に知られ、信州中野郡代に補せらる。治績頗る擧る。十二年勘定吟味役に遷され、十三年五月勘定奉行となり、近江守に任ず。嘉永三年八月死。年八十三。【三九】

荻原重秀　通稱五左衞門、また彦次郎と稱す。延寶二年十月召されて御勘定に列し、天和三年組頭に進む。貞享四年六月諸國御代官の會計參らざるものゝ檢察を命ぜらる。元祿三年佐渡の支配を兼ぬ。九年勘定奉行に進み、從五位下近江守に叙任す。知行は屢加增せられて寶永七年三千七百石となる。正德二年九月職を免ぜられ寄

合に列し、三年九月死。年不明。谷中長明寺に葬る。【六】

奥平昌高　雄藩篇掲出。【三】

小栗美作　郎左衛門某の子、越後高田侯德川光長の臣なり。名は正矩、國老に列し、荻田主馬と共に國務を預り聞く。人となり奸佞にして邪智あり、遂に陰謀を企て事露はれて死を賜はる。時に年五十六。【一二】

尾張義直　家康の第九子。母は相應院志水氏。幼字五郎太丸。慶長八年正月四歳にして甲斐二十四萬石を賜ひ、十一年八月元服を加へ、從四位下右兵衛督に叙任す。十二年閏四月尾張國に轉じ、美濃信濃の地を合せて六十一萬九千五百石餘を領し、清洲に居る。十五年名古屋城を築き移る。十六年三月從三位參議に陞り右中將を兼ね。大阪兩度の役從ふ。元和元年美濃の地三萬石を加へ、三年七月正三位權中納言となり、寛永三年八月從二位權大納言に進み、慶安三年六月死。年五十一。尾張家の祖なり。【二五】

大井正一郎　大阪玉造口與力大井傳次兵衛の子。一に釗一郎ともいふ。幼より甚だ粗暴にして兩親を苦しむること少なからず、天保六年三月坂本鉉之助の周旋にて大鹽平八郎の塾に入る。時に年廿一。然れども性來の粗暴改まらず、七年二月實家より歸塾の途亂醉し刀を拔いて人を傷けしことあり。平八郎の命により宇津木矩之允を殺害す。是より先傳次兵衛より久離願出であるを以て亂後傳次兵衛の家は罪を免る。【五五】

大久保讃岐守　名は忠實、天保五年七月大阪東町奉行となり、七年三月江戸城西丸御留守居に轉ず。【四〇】

大久保忠眞　幼字秀次郎、忠顯の子。母は杉山氏、出羽守、又安藝守に叙し侍從に任ず。後加賀守と改む。父に嗣ぎて小田原城主となる。文化七年六月大阪城代となり、十二年四月京都所司代に轉ず。文政元年八月老中に任ぜらる。時に年三十一。其初政意の如くならざりしが宿老下世し上座となるに及び賢俊を擧げ宿弊を改め庶政更新するところ頗る多し。天保八年三月九日病んで死す。年五十七。江戸青山教學院に葬る。【三九、七三、九〇】

大鹽格之助　名は尚志、字は子行。實は大阪東組與力西田青太夫の弟。平八郎の養子となり、天保元年家督を嗣ぎ、同八年三月廿七日自殺す。時に年二十七。妻いく、實は宮脇志摩の二女なり。【四六、五七、六九】

大鹽平八郎　幕府分解接近時代掲出。【二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四三、四五、四六、四七、五〇、五二、五三、五五、五七、六一、六三、六七、六九、七〇、七二、七四】

太田資始　備後守、又備中守と稱し道醇と號す。天保五年四月所司代より西丸老中となり、同八年四月老中となる。十二年六月辭す。安政五年六月再任して老中上座となり、勝手幷外國掛りを勤む。六年七月辭す。文久三年四月三たび老中上座となり同年五月辭す。【三二】

大西與五郎　大阪東組與力にして大鹽平八郎の母の兄なり。天保九年八月廿一日平八郎の事によりて遠島に處せらる。【五三、五八】

【カ行】

カ

高良齋　名は淡、字は子清、良齋は其の號なり。阿波德島の人、實は藩の中老山崎好直の庶子なり。後眼科醫高錦國の養嗣となる。十三歲の時より錦國に侍し眼科を學び、文化十四年十月長崎に遊び西洋醫學を修め、シーボルトの來るに及びまた之に從ひ學び、遂に鳴瀧校舍の塾頭となる。シーボルトの獄起るや連坐して投獄せられしが、最も師の爲に辯解に力めたりといふ。天保元年德島に歸り醫を業とし、後家を弟定國に繼がしめ、同七年大阪に移り、十一年明石侯に聘せられて其の醫員となる。弘化三年九月死。年四十八【八二】

柏岡源右衞門　攝津東成郡般若寺村年寄、同村橋本忠兵衞の紹介にて天保五年大鹽平八郎の門に入り、後亂に與みし二月廿五日支配役場に自首し出でやがて死す。【六三】

梶野土佐守　名は良材、文政八年六月廣敷用人より禁裏附となり、天保二年四月奈良奉行に轉じ、七年十二月京都町奉行となる。九年二月作事奉行に移り、十一年九月勘定奉行勝手方となり、十四年十月職を免ぜらる。【六二】

河合鄕左衞門　大阪東組同心、河合善太夫の子にして見習勤務中、天保八年正月廿七日三男謹之助を伴ひ出奔して大鹽亂には與からず。【四四、四八、五一】

河合八十次郎　鄕左衞門の子、天保十二年十二歲にて大鹽の門に入り、寄宿す。亂の起るに先ち密訴者の一人なり。【五一】

河口源次郎　初めは通稱勝次郎。名は奉興。秋元忠右衞門組御徒となり天文臺に出仕し、高橋作左衞門景保の手附下役となり、文化十一年の頃より日本輿地實測圖の製作に關與す。シーボルト事件に連坐し、天保元年三月中追放に處せらる。時に年四十八。終る處を知らず。【八六】

川路聖謨　通稱三左衞門、後左衞門尉と改む。敬齋また頑民齋と號す。徒士内藤吉兵衞の子。享和元年四月豐後日田代官所に生れ、後江戸に移り、小普請組川路三左衞門の養子となる。十八歲にして支配勘定出役に採用せられ、勘定吟味役、佐渡奉行、小普請奉行、普請奉行、奈良奉行、大阪町奉行を經て嘉永五年九月勘定奉行となり家祿を加增して五百石とせらる。安政五年西丸留守居に遷され、翌六年職を免じ、隱居す。文久三年五月再起せられて勘定奉行格外國奉行となり、ついで之を辭し隱居す。晩年中風を疾み、慶應四年三月時事を慨き病床に自殺す。年六十八。【一四、一五、一六、一九】

川路彌吉　聖謨に同じ。【一六】

川神谷轉　出石侯仙石氏の臣。江戸奥詰神谷七五三の弟。仙石左京の威福を擅にし主家に取つて代らんとするの野心を覬破し孤忠を拔んで、遂に其目的を達し後藩の家老となる。【一三、一四】

キ

木内惣五郎　下總公津村の人。農を業とし代々百餘箇村の割元名主を勤め、家また富む。寛永中租米の事により領主堀田正盛に直訴を企て正保二年八月處刑せられたりと傳ふ。【二一】

ク

熊澤蕃山　了介と同じ。【二六】

熊澤了介　松平定信時代揭出。【三九】

栗本鋤雲　初名喜多村哲三、幕府の醫官喜多村槐園の第三子。後栗本氏を嗣ぎ瑞見、又瀏兵衛といひ、鋤雲また匏庵と號す。初め安積艮齋に學び、後昌平黌に入る。又醫を多紀樂眞院、曲直瀨養安院に學び、嘉永三年內班侍醫に列す。安政五年蝦夷に移住し、文久二年士籍に列し、箱館奉行支配組頭となる。十二月江戸に出で昌平校頭取となる。明年七月監察となる。後主として外交の事に關與し外國奉行となる。慶應三年德川昭武に從つて歐洲に至り四年歸朝して歸農す。明治七年報知新聞社員となり、十九年辭す。明治三十年三月死す。年七十六。著書匏庵十種、横濱半年錄、五月雨草紙等あり。【二〇】

栗山大膳　名は利章、或は利亮ともいふ。筑前黑田氏の臣、利安の子。長政に近侍し屢〻功あり。父の後を嗣ぎて一萬八千餘石を領す。寛永五年疾を以て致仕せしが後命を受け再出仕して新主忠之を輔佐す。然れども不幸にして讒に遭ひ江戸に召され、罪を斷ぜられ寛永十年三月南部氏に預けられ盛岡に居る。承應元年三月死。年六十二。【一二】

栗山利安　播磨姬路の人、通稱は備後、小字は善助、十餘歲にして黑田如水に仕ふ。後諸所の軍に從ひ功あり。文祿朝鮮晉州の役殊に著はる。慶長庚子役また功少なからず。長政の筑前に封ぜらるゝや一萬五千餘石を賜り左右良城に居る。性謙讓にして矜らず。最も麤食美衣をきらふ。寛永八年死。年八十三。【一二】

黑田忠之　長政の長子、童字萬德、慶長七年福岡に生る。十七年元服して右衞門佐と稱す。翌年秀忠の諱字を賜はり忠長と名づく。後今の名に改む。大阪兩度の役從ふ。元和九年遺領を嗣ぐ。寛永三年從四位下侍從に叙任す。後島原一揆の亂を討じて功あり。十八年二月長崎守衞を命ぜられ、二十年より鍋島氏と交代番衞に當る。承應三年二月福岡に死す。年五十三。【一二】

ケ

ケンフエル　西曆千六百五十一年九月獨逸國レムゴーに生る。長じてブラウンシユウイツヒ、リユネブルグ、リユベツク等の學校に入り、博言、歷史、地理音樂を學び、ついで波蘭のクラコー大學、普魯西のケーニヒベルヒ大學に於て、哲學、外國語、生理歷史を研究し、後瑞典チヤーレス十一世の朝に仕へ波斯全權公使派遣に際し其書記官となり波斯に赴き、遂に轉じて印度よりジヤワに渡る。千六百九十年和蘭甲比丹に從ひ日本に來り長崎に居る。時に元祿三年五月にして年三十九。是より出島に留ること二年、甲比丹に從つて江戸に赴くこと

二回、千六百九十三年バタビヤに歸り翌年アムステルダムに著し皇帝侍醫となる。千七百十六年我が享保元年死す。年六十六。（八一）

コ

小泉淵次郎

大阪東組與力、郡山藩主柳澤氏の臣青木彌之助の甥、天保三年東組與力小泉忠兵衛の養子となり、大鹽門下に入り。擧兵の日町奉行所にて殺さる。時に年十八。【四八、五三】

古賀小太郎
古賀侗庵

侗庵に同じ。【三九】

精里の子。名は煜、字は季晦、侗庵は其の號なり。幼にして戲を好まず、群兒に敬憚せらる。寛政八年父の幕府の辟に應じて東上するに從ひ江戸に出で、勉學大に努め文化六年擢でられて幕府の儒者となり、米二百苞を賜はり父と並びて學政を董す。十一年兩番に遇み尋で御儒者に轉じ兩番の上に班す。弘化四年病みて死す。年六十。【三三、三六、一〇〇、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四】

小堀政方

初名政彌、金次郎と稱す。政峰の子。寶保二年伏見に生る。寶曆八年十二月從五位下備中守に叙任し、十一年二月遺領を繼ぐ。明和七年三月大番頭となり。安永七年十一月伏見奉行に轉じ和泉守と改む。天明五年十二月市人訴訟の件により職を奪ひて出仕を停止せられ、六年三月免さる。ついで八年五月政法宜しからざる事多く遂に領地を沒收せられ、大久保忠顯に召預けらる。【二一】

後水尾天皇

幕府分解接近時代掲出。【一】

近藤梶五郎

大阪東組同心近藤鍋五郎の子。大鹽平八郎の門に入り擧兵に與みし後謫に處せらる【四八】

【サ行】

サ

酒井忠清

忠行の子。寛永元年生る。十四年正月遺領を嗣ぐ。十二月從五位下河内守となる。十八年九月從四位下に昇る。二十年七月侍從となる。慶安四年少將に任ぜられ、雅樂頭と改む。寛文三年加封せられて十二萬石を領す。延寶八年また二萬石加封、天和元年二月致仕、五月十九日死。年五十八。【一二、一五】

坂本鉉之助

大阪玉造口與力、名は俊貞、字は叔幹、鼎齋また咬菜軒と號し、荻野流砲術の達人にて、大鹽亂の際には同心支配たり。大鹽とは交友の誼ありながら兵を率ゐて大鹽の徒鎭壓に向ひ功あり。萬延元年九月死。年七十。大阪高津大倫寺に葬る。著書咬菜秘記あり。【二八、二九、五五、五八、五九、六〇、六一、七〇】

酒勾清兵衛

出石仙石氏の臣にして本高八百石を知行す。荒木玄蕃等と共に仙石左京の爲に囚禁せられしことあり、遂にこの一件の爲に知行召上げらる。時に年六十四。【一四、一五】

佐竹義堅

佐竹義都の長男。元祿五年生る。享保五年十一月封を嗣ぎ、十二月從五位下豐前守に叙任し、十七年五月義岑の養子となり修理大夫に改む。十二月從四位下に昇る。寛保二年正月父に先つて死す。年五十一。【一二】

佐竹義都

義寛の子。幼字所化丸。寛文五年生る。元祿元年三月御小性となり、十四年宗家右京大夫義處の封一萬石を

分與せらる。寛永六年三月從五位下式部少輔に叙任す。享保五年十一月致仕し、十年二月死す。年六十一。【一二】

佐竹義處　義隆の子。寛永十四年生る。承應三年十二月從四位下左京大夫に叙任し、寛文九年十二月侍從に進み、十二年二月遺領を嗣ぐ。元祿十一年少將に進み、十四年封地の内二萬石を弟義長に、一萬石を甥義都に分與す。十六年六月入國の途病み發し横手驛に死す。年六十七。【一二】

佐竹義隆　實は岩城貞隆の嫡男、元和六年貞隆の後を嗣ぎ、寛永元年十二月從五位下修理太夫に叙任す。三年四月佐竹義宣嫡子義通を廢嫡するに及び、入りて其嗣となる。この年從四位下侍從となる。十年二月遺領を嗣ぐ。寛文六年十二月少將に進み、十一年十二月久保田に死す。年六十三【一二】

佐竹義宣　義重の子。左京大夫と稱す。天正十八年正月水戸城を守る。蒔いで父に代りて國政を執る。又秀吉に通じて忍城攻撃に參加し、五月兵を率ゐて小田原に至り秀吉に謁す。戰後常陸一國を與へられ、德川、毛利、上杉、前田、島津と併せて天下の六大姓といはる。秀吉死するや、石田三成に通じ密に圖るところあり、關原役後秋田二十萬石に移さる。大阪の役東軍に從ひ功あり。寛永十年正月死。年六十四。【一二】

佐竹義格　義處の子。元祿七年生る。十三年十一月嫡子となり、十六年八月遺領を嗣ぐ。寛永五年十二月從四位下侍從に叙任し大膳大夫をかぬ。正德五年七月久保田に死す。年二十二。【一二】

佐竹義長　義隆の四男。明暦元年生る。寛文十年十二月從五位下左近將監に叙任し、延寶四年十二月壹岐守に改む。元祿十四年兄義處の封の内二萬石を分ち與へらる。享保三年九月致仕し、元文五年十二月死す。年八十六。【一二】

佐竹義苗　義處の子。寛文十一年生る。貞享元年十二月從四位下修理大夫に叙任す。元祿十二年六月父に先つて死す。年二十九。【一二】

佐竹義岑　義長が長男。元祿三年生る。正德五年義格が終に臨んで養子となり、九月遺領を繼ぎ、十二月從四位下侍從に叙任し、右京大夫を兼ぬ。延享元年十二月少將に進み、寛延二年八月久保田に於て死す。年六十。【一二】

佐藤一齋　名は坦、字は大道、通稱は捨藏、一齋また愛日樓、老吾軒等と號す。安永元年十月生る。其家代々岩村侯松平氏の家老職たり。長ずるに及び騎射刀槍の術を習ひ又兵學を學ぶ。寛政二年士籍に上り後之を脫して京阪に出で中井竹山皆川淇園に學び五年江戸に出で林家の門に入り、享和二年其の塾長となる。天保十二年幕府の儒官となり、俸二百苞十五口を賜ひ昌平黌官舍に住せしめらる。是より及門の士頗る多し。嘉永二年更に俸米百苞を加ふ。安政六年九月死。年八十八、江戸麻布深廣寺に葬る。著書十餘種、何れも世に行はる。【四一、七五】

シ

篠崎三島　通稱は長兵衛、名は應眞、字は安道、

篠崎小竹

三島また郡州と號す。父の代に大阪に出で商を業とし、三島に至り益〻貨殖を計り多くの書を購求す。又屢〻財を散じて人の急を救ひ家産やゝ傾く。四十の年轉じて儒となり帷を下して諸生を教授す。來り學ぶもの頗る多し。人となり温達にして事を處する明快、人と語るに廻避するところなし。肥後の藪孤山、肥前の松江某等皆之を稱す。文化十年十月死。年七十七。著書碧紗籠集、草稾、論孟述意放言等あり。【二七】

名は弼、字は承弼、小竹また畏堂と號す。實は豐後の人加藤吉翁の男、幼にして父に從ひ大阪に寓し、九歳にして篠崎三島に從ひ遂に養はれて其嗣となる。初め專ら家學を修め後四方に周遊し山水人物を訪ひ、遂に家を脱し江戸に出で古賀精里に從ひ學ぶこと半年、歸つて父に代つて諸生に教授し最も信頼を受く。其書詩甚だ勞せずと雖自ら珠玉をなす。時人皆之を稱す。嘉永四年五月死。年七十一。【二七】

柴田勘兵衛

大坂玉造口與力、佐分利流の槍術に達し、大鹽平八郎の師範たり。又平八郎の亂を平ぐるに功あり。【二七、二八、二九、六〇、六一】

柴田外記

名は朝意、初め中務、また内藏介と稱す。實は佐竹親榮の子。柴田但馬守宗朝の子となる。父に嗣ぎて伊達氏に仕へ、登米郡米谷を食む。寛文中富塚重信と同じく國老に任ぜられ三千石を賜はる。後奸臣原田甲斐と爭ひ訟廷に於て甲斐と鬪ひ傷を負ひて死す。時に寛文十一年三月、年六十三。子中務職を襲ふて國老となる。【二七】

シーボルト

獨逸ウュルツブルグの人。學問洽博、最も醫學及び植物學に通ず。我が文政三年ウュルツブルグ大學を了へ五年職を東印度會社に奉じ、六年甲比丹ストウルレルに從ひて長崎に來り出島に住す。後中川郷鳴瀧に邸宅を賜ひ、此處にて吉雄權之助の通譯により醫術及び植物學を教授し傍ら日本に關する著述をなす。文政十二年高橋景保より地圖を受るの事に座し幕府に罪を得しが後許されて歸國し、安政六年再來、文久二年歸國。我が慶應二年九月ミュンヘンに死す。年七十一。【八一、八二、八三、八四、八五、八六、九七】

澁川景祐

通稱助左衛門、幼字善助、高橋至時近世日本國民史　人物概覽

の二男、天明七年十月大阪に生れ後父に從つて江戸に移る。人となり穩健にして學を好み、文化二年三年の間伊能忠敬と共に沿海測量に從ひ、同五年八月幕府の天文方澁川富五郎正陽の養嗣子となり、翌年其家督を相續し天文方に任ぜらる。天保七年實父の遺業たるランド暦書の譯解を完成し幕府に呈す。十年御鐵砲御筆筒奉行格に昇進す、其後寛政暦書新法暦書數理等の書を編して上り賞せらる。弘化二年其子敬直事を以て罪を得しが、しかも景祐に及ばず。安政三年六月死。年七十。次男佑賢嗣ぐ。【八四】

澁川伴五郎

其の祖伴五郎名は義方、關口氏業に從ひ學び、後一家をなし、澁川流柔術の祖となる。伴五郎は即ち其の後

なり。【一三】

島田忠政　初名利木、後守政また忠政に改む。島田幽也利正の四男。寛永十七年三月御小性組番士に列し、十九年十月父の采地武藏入間郡の内にて千石を分ち賜はり、明暦二年三月御徒の頭に進み、萬治元年九月御目付となる。寛文二年五月長崎奉行に進み、七年閏二月江戸町奉行となり、廩米千俵を加增せられ、十二月從五位下出雲守となる。元祿八年十二月致仕し、十二年七月死。年七十六。法名幽山。【一二】

島津重豪　雄藩篇揭出、【三、八二】

島津齊宣　雄藩篇揭出。【九二】

下河邊林右衞門　名は與方、初めは通稱を政五郎といひ、後今の名に改む。初め西丸御書院番山口和泉守の同心なりしが後、大御番安藤出雲守の同心となり、後更に二丸火の番に移る。算數の學を古川謙に學びて曆局に出役し、高橋作左衞門景保の手附下役となり曆算に關する業を執る。文化二年以來伊能忠敬に從ひて測量製圖のことに關與す。文政十一年作左衞門の命によりシーボルトに與ふる地圖を描畫したる故を以て天保元年三月中追放に處せらる。時に年五十二。終る處を知らず。【八六】

庄司義左衞門　大阪東組同心、河內丹北郡東瓜破村百姓助右衞門の子。文政四年攝津住吉郡堀村百姓久右衞門事茂左衞門の子となり、同年九月東組同心庄司百藏の養子となる。七年廿七歲にして大鹽平八郎の槍術の門人となり、天保二年より讀書を受く。大鹽兵亂に與みし武具調達等に盡力し、後捕へられ牢獄中に死す。【三四、四八、六三】

白井孝右衞門　また幸右衞門とも記す。大阪守口町にて百姓と質屋とを營めり。文政八年、三十七歲にして大鹽の門に入り、其の爲に勝手向を賄ひ、動亂の際大鹽の爲に最も力を盡し、後禁刑に處せらる。【三四、四四、四八、六三】

ス

崇源院　秀忠將軍夫人。父は淺井長政、母は織田信長の妹小谷方、長政死するや、母柴田勝家に再醮す。天正十一年勝家自殺するの時母三女子を出して勝家に殉す。秀吉三女子を得、自ら長を寵幸す。是を淀殿となす。次は京極高次に嫁す。後の常高院なり。季は卽ち夫人。始め佐治一成に嫁し、次いで羽柴秀勝に嫁し、秀勝死後更に秀忠に嫁す。天樹夫人、天崇夫人、與安夫人、家光、忠長及び東福門院を生む。寛永三年九月江戸に死す。崇源院昌與和譽仁清と謚す。【二四】名は定志、三河新城七千石を知行す。天保四年三月より大阪東小屋大番頭となる。【五八、六二】

菅沼織部正

杉原官兵衞　出石仙石氏の臣、年寄となる。左京の一件に連座し重追放に處せらる。時に年六十八。【一七】

セ

瀨田濟之助　大阪東組與力、豐田貢事件に大鹽平八郎と同役たりし瀨田藤四郎の養子にして大鹽の門に入り、擧兵に參與す。後河內高安郡恩知村の山中に自殺す。時に年二十五ばかり。【四八、五三、五七、六三】

錢屋五兵衛　其祖は加賀國能美郡清水村に出づ。代々農を業とせしが、市兵衛なるものゝ代に至り、石川郡宮腰浦に出で金錢兩替を業とす。故に一般に錢屋を以て稱せらるゝに至る。市兵衛より五代の後を五兵衛といひ、その子五兵衛の代に至り船商を始む。こゝに所謂る五兵衛は第三代五兵衛にして始めは茂吉といひ、近村木谷藤右衛門の家に使役せられ、後父の遺業を嗣ぎ遠く蝦夷北海に貿易し巨利を博し、遂に北米合衆國とも交易するに至る。晩年事を以て獄に投ぜられ遂に獄中に死す。時に嘉永六年十一月なり。【一〇四】

仙石權兵衛　名は秀久、天文二十年美濃國に生る。少年より秀吉に仕へ武勇の名あり。天正十一年より淡路國を領し、七月從五位下越前守に叙任し、十三年豫國に移封す。後故あり封を沒せられ小田原役の際免されて先陣の目付となり、功を以て信濃小諸五萬石を與へらる。慶長庚子役德川氏に屬し、宇都宮に從ひ、又上田城を攻めて功あり。十九年五月死す。年六十四。岩村田西念寺に葬る。【一四】

仙石左京　出石仙石氏の家臣、千五百石を知行し家老となる。威福を擅にし幼主を挾みて遂に主家を奪はんとし謀計露顯して鈴森に刑せらる。時に年四十九。【一三、一四、一七、一八】

仙石道之進　出石城主仙石越前守政美の子。名は久利。文政三年二月廿三日生る。父の後を嗣ぎ出石五萬八千八十餘石を領せしが、家臣左京の件により、天保八年十二月二萬八千八十餘石を削らる。【一三、一四、一八、一九】

仙石靱負　名は政房、實は仙石勘解由久矢の子。延享元年信州上田に生る。寶永五年七月宗家政明の養子となり、十二月從五位下信濃守に叙任す。享保二年八月遺領を繼ぐ。七年十一月奏者番となり、十九年六月寺社奉行を兼ぬ。二十年四月死す。年六十三。【一四】

【タ行】

タ

高井山城守　名は實總、文政三年十一月大阪東町奉行となる。天保元年八月病により江戸參府を許され、十一月願により職を免ぜらる。【三一、三二、三三、三四、三八、四三、七三】

高嶋秋帆　四郎太夫と同じ。雄藩篇掲出。【八一】

高野長英　名は譲、瑞皐と號す。陸奥水澤の人。本姓は後藤、實仁の第三子。文化十四年外叔父關醫高野玄齋の養子となり、家業を承けてほゞ醫書を讀み、又漢籍を坂野長安に學ぶ。文政三年江戸に出で藥舗神崎源造方に寓し吉田長叔の門に入り、其一字を與へられ長英と名のる。ついで胸留正見の門にも遊ぶ。後長崎に至りシーボルトに敎を受く。疑獄の際幸にして免れ、天保元年江戸に出で醫療と飜譯とに從事す。天保九年十月夢物語を著し、幕府の忌諱に觸れ捕へられ牢獄に投ぜられ終身禁獄に處せらる。弘化二年三月脫獄し名を改めて四方を遊歷し志士と交りしが、幕吏に偵知せられ其家を圍まれ自殺す。時に嘉永三年十月、年四十七。明治三十一

年七月正四位を贈らる。【八一、八二、九七、九八、九九、一〇〇】

高橋九右衛門　河内茨田郡門眞三番村百姓、天保元年白井孝右衛門の紹介にて大鹽の門に入り、天保五年頃より大鹽の勝手向の世話をなせり。擧兵の際一たび平八郎等と逃れ淀川に泛びしが、柏岡源右衛門と天滿橋北詰に上陸し、高野山眞福院に隱れ、間もなく出て丶支配役場に自首し、後罪せらる。【六三】

高橋小太郎　名は景僕、作左衛門景保の第一子。文政五年閏正月天文方見習となる。同九年四月七人扶持を給せらる。十三年三月父の罪科により遠島に處せられしが、天保十年五月家治將軍五十回忌當り赦ににあふて歸り、十二月天文方山路彌左衛門の手附とせらる。弘化二年新規召出を受け十人扶持を賜はり小普請入を命ぜられ松平美濃守支配に屬す。山路彌左衛門手附たること舊の如し。同三年三月御作事方に轉じ、當分假役として出役を命ぜらる。元治元年六月死。【八五】

高橋作左衛門　幼時作助と稱す。名は景保、字は子昌、觀巢、玉岡また蠻無と號す。大阪の人作左衛門至時の子。幼時父に從ひて江戸に出で、慧敏にして享和元年聖堂の試に應じて賞を得しことあり。よく父に就きて天文曆數の學を修め、文化元年父の後を承けて幕府の天文方となる。文化十一年二月御書物奉行に任ぜらる。又父に嗣ぎて伊能忠敬測地の業を監視してよく之を大成せしめたり。歴幕府の命を奉じて海外書物を飜譯し進獻して賞せらる。後所謂シーボルト事件に坐して獄に入り、遂に獄中に死す。時に文政十二年二月十六日、年四十六。墓は下谷源空寺にあり。【七七、七八、七九、八〇、八二、八三、八四、八五、九二、九三】

高橋作次郎　名は景福、作左衛門景保の次男、文政十三年三月兄小太郎と共に遠島に處せられしが、天保十年赦にあひ歸り間もなく死す。年三十四。【八五】

高橋東岡　作左衛門至時に同じ。雄藩篇掲出。【七七】

高山彦九郎　田沼時代、松平定信時代、雄藩篇掲出。【四〇】

竹上萬太郎　弓奉行上田五兵衛組同心、文化二年十七歳の時兄熊三郎病氣につき、其養子となりて職を嗣ぎ、文化十一年の頃大鹽の門に入れりといふ。擧兵の際は同心小頭たり。反忠をなせしが反忠とならず却りて引廻の上磔を申渡され、天保八年九月十八日鳶田に於て處刑せらる。【五三】

竹内玄同　名は幹、西坡と號す。玄同は字なり。幼名麒麟太、加賀大聖寺の人、玄立の第二子。越前丸岡侯の醫官にして叔父なる玄秀に愛はれて其嗣となる。壯時京都に遊び藤林晋山に從ひて醫學を修め、後長崎に至りてシーボルトに學ぶ。天保四年鄕に歸りて丸岡侯の侍醫となる。幾もなくして江戸に出で、天保十三年德川幕府より蘭書飜譯手傳を命ぜられ、安政五年侍醫に擧げらる。後法眼より法印に叙し渭川院と稱す。文久三年三月家茂將軍に從ひて京に上り失明し、慶應二年辭職隱居し、明治十三年十

一月死す。年七十六。【八二】
寶曆明和篇、幕府分解接近時代掲出。

竹内式部

伊達綱村

【四〇】
綱宗の子。初名綱基、萬治二年生る。三年八月綱宗逼塞せしめらるゝに及び封を襲しめらる。寛文九年十二月元服して將軍家綱の諱字を賜ひ從四位下少將に叙任し、陸奥守と稱す。十一年原田甲斐等の事件ありしが弱年の故を以て封を收められず。元祿八年十二月中將に進み、從四位上に上る。享保四年六月病を以て死す。年六十一。仙臺の大年寺に葬る。【一二】
幼字は梵天、輝宗の子。世々陸奥伊達郡を有す。天正十二年十八歳にして父の讓りを受く。十三年二本松城主畠山義繼を殺し、十六年蘆名家を亡ぼし、會津七郡を併領し、黒川城に移り居る。十八年豐臣秀吉に謁見し、十九年三月上洛して侍從越前守となり羽柴の姓を賜ふ。此年始めて岩手澤城に移る。文祿征韓の役功あり。秀次誅を秀吉に得るに及び嫌疑を被り、家康によりて救解を得、これより心を傾けて德川氏に盡す。慶長庚子の役上杉氏と戰ひ白石城を取る。この年仙臺城を築く。大阪役また功あり。戰後正四位下參議に陞り、寛永三年八月從三位權中納言となる。十三年五月死。年七十二。【一二】

伊達政宗

政宗の子。元和七年仙臺に生る。正保二年十二月從五位下兵部少輔に叙任し、後兵部大輔に改む。萬治三年綱宗逼塞せしめられ龜千代綱村立つに及び、田村宗良と共に國政執行を命ぜられ、磐井郡三萬石を分ち賜はる。寛文十一年四月原田甲斐の事件に坐し幕府の咎を受け松平豐昌に召し預けらる。【一二、一五】

田中從吾軒

名は參、下總佐倉藩士、小長井小舟の兄なり。著書隨閑文鈔あり。【五五】
寶曆明和篇、田沼時代、松平定信時代掲出。【一】

田沼意次

平信長

織田信長に同じ。雄藩篇掲出。【一〇二】

ツ

筒井政憲

肥前守、伊賀守、又紀伊守と稱す。文化十二年九月目付となり、十四年七月長崎奉行に轉ず。文政四年正月町奉行に任じ其吏の稱あり。天保十一年五百名を加增せらる。十二年正月西丸留守居學問所用向取扱となる。十三年三月水野越前守と意協はずして罷めらる。外國の事起るに及び長崎に赴き露國使節に應接す。嘉永七年七月大目付海防掛りとなり、阿部伊勢守の顧問に備はり參畫するところ多し。安政四年正月鈴奉行となる。【一三、一四、一八、一九】

ト

土井利位

大炊頭と稱す。下總古河城主。八萬石を領す。利廣の嗣。天保五年四月大阪城代となり、八年五月京都所司代に移る。九年西丸老中となり、十年十二月老中となる。十五年十月辭す。【五八、六〇、六二、六六、六七】

土井能登守

名は利忠、越前大野藩主、四萬石を領す。字は隆卿、幼字錦橋。始祖利房七世の孫。文化八年四月生る。文政元年利器の嗣となる。同十年十二月從五位下に叙し。能登守に任ぜら

れ、十一年正月加冠す。天保元年二月大阪加番を命ぜらる。この間朝川善庵を聘し、士民と共に其講義を聽きよく藩政を整ふ。八年加番の任滿ち江戸に歸る。同十四年七月新たに學校を設け士民を教授し後之を明倫館と名づく。ついで蘭學館を起し蘭學及醫學を稽古せしむ。又亘船大野丸を作りて北海に貿易し大に利を擧ぐ。後また大阪加番たること一二回、明治元年十二月死。年五十八。明治四十二年從三位を贈らる。【五八、六二】

徳川家齊

松平定信時代、幕府分解接近時代掲出。【一、二、三、一〇六】

徳川家光

松平定信時代、雄藩篇掲出。【一】

徳川家康

家康時代以下各篇掲出。【一、一〇二】

徳川家慶

幼名敏二郎。家齊の第四子。母は押田敏勝の女。寛政五年五月生る。九年元服して從二位權大納言に任叙し、文化十三年四月右大將を兼ね。文政五年三月正二位、十年三月從一位に進み、天保八年家齊の讓を受け家を嗣ぎ、九月征夷大將軍に任じ内大臣を兼ぬ。在職中水野忠邦を任用し弊政を改むること多し。嘉永六年七月二十二日薨ず。年六十一。慣德院と謚す。勅して正一位太政大臣を贈らる。【一、一〇六】

徳川秀忠

德川第二代の將軍なり。家康の第三子。幼子長丸。母は寶臺院、西郷清員の女。天正七年四月遠州濱松に生る。十五年八月從五位下藏人頭に叙任し、爾來累進して文祿元年九月從三位權中納言となる。慶長六年權大納言に陞り、八年右大將を兼れ、右

馬寮御監となり、十年征夷大將軍を拜し、正二位内大臣となる。十九年三月從一位に叙し右大臣に任ず。元和二年家康死してより始めて自ら國政を執る。九年七月職を子家光に讓り、西丸に老し、寶永三年上洛して太政大臣となる。九年正月死。年五十四。芝增上寺に葬る。【一】

徳川吉宗

吉宗時代、松平定信時代、幕府分解接近時代掲出。【一】

戸塚靜海

名は維泰、字は藻德、春山また靜海と號す。父維義醫を以て遠州掛川侯に仕ふ。靜海は其季子なり。文化十三年十東井齋に蘭書を學び、又松崎慊堂に漢學を受く。文政三年江戸に出で宇田川榕齋の門に入りまた蘭學を學ぶ。後長崎に至りシーボルトに從ひ學ぶ。シーボルト歸國の後數年長崎にありて子弟を教授し、天保三年江戸に出で醫を茅場町に開き十三年島津氏の侍醫となる。安政五年島津齊彬死後德川幕府の侍醫となり。法印に叙し靜春院と稱す。明治九年一月死。年七十八。【八二、八三】

【ナ行】

ナ

永井甚左衛門

名は充房、通稱要助、後甚左衛門と改む。大御番小笠原備後守同心にして幕府の天文臺に出役し、高橋作左衛門景保の手附下役となる。文化六年以來伊能忠敬の測地事業に從ひ伊豆七島地方測量の際は忠敬に代り自ら班長となり、能く功を奏せり。後シーボルト事件に關與し罪せらる、時に年五十六。終るところを詳

にせず。【八六】

永井直興　攝津高槻城主。直過の嗣、三萬六千五百三十石を領す。【六二】

中江藤樹　松平定信時代拔出。【二六、三九】

永瀨七三郎　大阪惣年寄、大鹽亂の際今井克復等と同じく火消人足を從へ附近警戒の任に當れり。【六六】

楢林榮建　靜山と號す。楢林榮哲の長男。享和元年五月生る。幼より父に從ひて蘭學醫術を修め、文政十一年四月父の後を嗣ぐ。時に年三十。シーボルト來るに及び之と交り周旋すること多し。獄の件起るに及び禍の身に及ばんことを恐れ、家を弟宗建に讓りて京都に出で、岩倉村、大津宿、京都市内富小路三條上ル蓬に居り醫業を開く。嘉永二年宗建より痘苗を取寄せ種痘所を設け、種痘の普及に努めて功あり。明治八年十一月死す。年七十六。著書西洋大術表、軍艦表等あり。【八一、八二】

楢林宗建　榮建の弟。名は潛また高房、字は孔昭、和山と號す。享和二年三月生る。少より家學を受け。シーボルト渡來以來之と交り周旋すること多し。文政十年四月父の祿を襲ひて佐賀藩に出仕し、御側醫師格となる。弘化元年十二月出島蘭館の出入醫師となる。三年二月外塾大成館を設け廣く諸生に醫學を教授す。四年八月以來藩命を受け痘苗を輸入し種痘を開始し、後其痘を江戸、京都、大阪、久留米、大村、平戸、唐津等に分與せり。實に我國種痘の嚆矢たり。嘉永五年十月死。年五十一。著書牛痘小考、痘醫方函等あり。明治三十一

年十月正五位を贈らる。【八二】

西村利三郎　河内志紀郡弓削村百姓、一名七右衛門、大鹽平八郎の門に入る。【六三】

二宮敬作　如山と號す。伊豫西宇和島郡磯津浦大字磯崎浦の人。父は彌六。文化元年五月生る。幼にして醫學に志し、文政二年長崎に遊び、遂にシーボルトに從ひ學ぶこと六年、シーボルトの事件に關し數月獄屋に繫がれ、天保元年宇和島に歸り醫業を開く。高野長英の宇和島に來るや之を隱匿せることあり。後藩醫となる。安政四年中風を患ひたれどもシーボルトの再來をきゝ長崎に至りて醫業を開く。ついて宇和島に歸り、文久二年三月死。年五十九。【八二、八三】

仁孝天皇　御諱は惠仁、光格天皇第四皇子。御母は東京極院藤原婧子。寛政十二年二月聖誕。文化六年光格天皇の太子となり、同十四年三月受禪、九月即位す。天保十二年閏正月譲を先帝に上りて光格天皇といふ。宇多天皇譲法を停められてより殆と六十世にして舊に復す。在位三十年。改元するもの三。弘化三年正月崩御。御壽四十七。京都下京今熊野町泉涌寺後月輪陵に葬る。【一】

野田笛浦　丹後田邊の儒者。牧野氏の臣。名は逸、字は子明、通稱希一。十三歳にして江戸に出て古賀精里に從ひて學ぶ。家貧にして劉苦精勵せしが、後藩主より學費を給せらる。文政九年清國の商船駿河清水港に漂著するや、古賀侗庵の薦を受け、行いて之と筆

談し、清客江芸閣、朱柳橋等をして敬服せしむ。唱和の詩泰得船筆語にあり。この爲大に名聲を博し、遂に擢んでられて藩の執政となる。治績大に擧る。晩年屢々骸骨を乞へども許されず。安政六年七月病んで死す。年六十一。其詩文は海紅閣小稿、嘉永二十五家絶句等にあり。【五五】

【ハ行】

ハ

橋本忠兵衛　名は貞、字は含章、大阪近在般若寺村庄屋にて五十石の田畑を有せり。大鹽平八郎妾ゆうの假親、格之助妻みねの實父にして、白井孝右衛門と同じく平八郎に金銀の蝙通をなせり。天保八年五月十九日牢死。年四十二。【四八、六三】

畑崎　鼎　初め藤市事藤平と稱し、シーボルト來の時和蘭人部屋附なりしがシーボルトに親炙し、學ぶところ少なからず。疑獄の際嫌疑を被り久しく入牢し町預けとなりしが、天保元年閏三月脱走し、大阪に出で蘭學塾を開く。同四年の頃西學都講として水戸藩に聘ぜられ、譯述の書少なからず。八年四月藩命により長崎に赴き脱走の罪露顯し、捕へられて江戸に送致せらる。明年十一月輕追放に處せられ、薩野藩主土方仙之助に預けられ、天保十三年七月病んで死す。墓は薩野如來寺にあり。【八二】雄藩篇掲出。【五八】幕府分解接近時代、雄藩篇掲出。【八三、八六】

馬場佐十郎　名は義壽、桑翁と號す。安藝吉田の人。十七歳京都に出で和田泰純に從ひ醫學を修め、二十五歳にして歸鄉し、父祖の業の眼科醫を開く。後諸國を廻りて研究益々精しく、遂に大阪に開業す。文化五年江戸に出で、七年二月擢でられて幕府の侍醫となり俸百苞を受く。十三年十二月法眼に叙す。文政九年シーボルトの江戸に來るや是に面會し醫術を問ふ。後罪を得牢獄に繫がれ、天保八年より減刑せられて永蟄居となる。嘉永元年八月腎臟を病みて死す。年八十七。【八二、八三、八六】

馬場爲八郎　松平定信時代、雄藩篇掲出。【二六】文政八年四月側用取次より奥向並勝手掛りとなり三千石加增せられ、天保五年十二月また三千石加增、同十年三月五千石加增、十二年四月職を免ぜられ、菊之間縁頰詰、加增の内八千石召上られ差控を命ぜらる。【三】

土生玄碩　仙石氏老臣、本高六百石を食む。左京騒動の件により咎を受け知行召上げられ、十人扶持を賜はり、小人町明屋へ引移り申渡さる。【一四】名は宗輔。伊達氏の家老なり。父宗資の後を嗣ぎ八千石を食む。伊達宗勝の宗家を奪はんとするを輔け、幼主龜千代を立て專恣度なく、遂に幕府に訴へられ營中に對決し斫らる。時に寛文十一年三月、年五十三。【一二】

ヒ

比田小傳次　大阪天滿組惣年寄なり。大鹽逮捕の際今井官之助等と火消人足を率ゐて附近警戒の任に當れり。【六六】松平定信時代、雄藩篇掲出。【二】

一橋治濟　名は正愨、通稱健之助、後に喜藏と。

林　述齋

林　忠英

稱す。字は子愚、樂齋は其の號なり。伊勢津藩の臣。【三八、三九】

平山助次郎　大阪東組同心、文政三年十五歳にして見習勤となり、翌年大鹽平八郎の門に入り、天保七年町目附に進む。亂前自首し出で賞せられて御譜代席小普請入となる。【四三、四五、四八、五〇】

フ

藤田東湖　田沼時代、雄藩篇掲出。【二〇、四五、五五、九一】

古内志摩　名は義如。通稱初めは治太夫、後ち志摩と改む。代々仙臺伊達氏に仕へ、父の代より三千五百石を賜はる。寛文八年選ばれて令尹となる。原田甲斐刄傷一件の際は別室にあり、免るゝを得たり。延寶元年病みて死す。【一二】

ヘ

別木庄左衛門　江戸の處士なり、初め軍法を山本兵部に學び、後去つて石橋源右衛門に學ぶ。承應元年九月同門の士林戸右衛門等と亂を謀り、事顯はれ磔刑に處せらる。【二四】

ホ

北條遠江守　名は氏喬、河内丹南郡狭山一萬石の領主。天保四年三月より大阪西小屋大番頭たり。【五八、六二】

堀田正信　正盛の子。寛永八年生る。正保元年十二月從五位下上野介に叙任し、慶安四年八月遺領を嗣ぐ。萬治三年事によりて封を沒せられ、弟脇坂安政に預けられ、信濃飯田に配せらる。寛文十二年五月酒井忠直に預けられ、若狭小濱に移る。ついで延寶五年松平綱通に預けられ、阿波徳島に移る。八年五月厳有院家綱の薨去を聞き鉄を以て自殺す。年五十。【二一】

堀伊賀守　又伊豆守と稱す。名は利堅。天保二年八月目付となり、六年九月仙洞附となる。七年十一月大阪町奉行に任ず。十二年六月普請奉行となり、十月作事奉行となる。弘化二年五月三百石加增、大目付となる。安政五年二月留守居に轉じ、文久二年七月隱居す。【五一、五八、六六】

本多忠籌　松平定信時代、雄藩篇掲出。【一、一〇六】

本多爲助　大坂御定番遠藤但馬守組與力なり。大鹽の亂に當り坂本鉉之助と共に出で、鎭定の任に當り功を以て御譜代仰付られ、又金五十兩を賜はる。【五八、六〇、六一】

近世日本國民史　人物概覽

【マ行】

マ

曲淵甲斐守　名は景山、大鹽亂の際堺奉行たり。大阪町奉行加勢として兵を出す。【六二】

牧野備前守　名は忠精、忠寛の子。寶曆十年生る。明和三年八月遺領を嗣ぎ越後長岡七萬石を領す。安永四年閏十二月從五位下備前守に任叙す。天明元年四月奏者番となり、七年十二月寺社奉行を兼ぬ。寛政四年八月大阪城代となり、從四位下に陞る。十年十二月所司代に補せられ侍從に進む。享和元年七月老中となり文化十三年十月病により免ぜらる。文政十年二月再び老中となり家慶に附せられ、天保二年四月老衰により職を辭し隱居す。

松浦靜山【二一】清に同じ。田沼時代掲出。【三、八四】

松浦誠之　字は千之。大鹽門下の一人にして大學刮目及び劄記校訂者の一人なり。【五四】

松平伊豆守　名は信順、天保二年五月大阪城代となり、五年四月京都所司代に轉ず。八年五月老中となる。同年八月病により職を免ぜらる。【六二】

松平左近將監　名は康爵、周防守康任の子、天保六年十二月家督を讓られ、ついで石州濱田より奥州棚倉へ轉封を命ぜらる。仙石事件によりてなり。【一九】樂翁定信の子。寛政九年四月父に嗣ぎて陸奥白河の城主となり、文政六年伊勢桑名に移封。【九〇】

松平定信　松平定信時代、幕府分解接近時代、雄藩篇掲出。【一、二、三、六、二六、一〇六】

松平周防守　名は康任、本姓は松井氏、石見濱田城主、康定の嗣。文政五年七月大阪城代となり、八年五月京都所司代に移る。九年十二月老中となり、五千石加賜せらる。天保六年十一月願により職を免ぜらる。ついで仙石左京一件により隱居謹慎を命ぜらる。【一三、一五、一六、一八、一九、二〇】

松平齊典　初名矩典。文化十三年兄直溫の後を嗣ぎ、川越城十五萬石を領す。從四位下大和守に任叙し後侍從となる。文政三年相模三浦郡の守備を命ぜらる。夙に學を好み、城下に學館博喻堂を起し一藩子弟を教育し、又紐山陽の日本外史を出版せり。嘉永二年十一月死。年五十三。【九〇】

松平信明　松平定信時代掲出。【一、二、三、六、六二、一〇六】

松平信禮　信復の子。幼字普之助。元文二年生る。寶暦元年十二月從五位下甲斐守に叙任し、明和五年十一月遺領を繼ぎ伊豆守に改む。六年十月奏者番となる。七年六月二十二日死。年三十四。仁峰宗恕惡雲院と號す。【二】

松平信綱　幼字長四郎、慶長元年生る。大河内久綱の長男、後叔父正綱に養はる。九年七月家光に附屬す。元和九年小姓組番頭となり、從五位下伊豆守に叙任す。寛永九年宿老に准じて勤仕すべき旨命ぜらる。十年阿部忠秋等五人と政を議すべき旨命ぜらる。是を六人衆といふ。是歳武藏忍城一萬五千石を賜ふ。十四年命を奉じ島原一揆を討す。十六年正月川越に移封、三萬石加增せらる。又屢〻加封あり、正保四年總て七萬五千石を領す。明暦元年十月朝鮮信使に應接す。江戸大火の後、回向院建設の事を奉行す。寛文二年三月死。年六十七。岩槻平林寺に葬る。後これを野火止に移す。【二】

松平光長　越前侯忠直の長子。小字は仙千代。父忠直配流の後越後高田二十四萬石に封ぜらる。寛永六年四月元服し、家光の諱字を賜はる。從四位下左近衛權少將に任じ越後守を兼ぬ。慶安四年十二月從三位權中將に轉ず。後家を理する能はざるの故を以て封を奪はれ、松山に幽せらる。貞享四年赦にあひ、廩米三萬俵を賜はる。寶永四年十一月死。年九十三。【一二】

松平宗發　丹後宮津城主。實は本庄氏、伯耆守と

稱す。文政九年十一月大阪城代に任ぜられ、十一年十一月京都所司代に轉ず。天保二年六月老中に任じ、六年十月より本丸勸めを命ぜらる。七年九月西丸に轉ず。十一年九月死。【三二】

松前若狭守　前田吉德

幕府分解接近時代掲出。【八八】

綱紀の子。初名利興、また吉治、元祿三年生る。十五年六月元服し將軍諱字を賜はり、正四位下少將に叙任し、若狭守と稱す。享保八年五月封を襲ひ、中將に轉ず。元文五年十二月參議に進み、延享二年六月金澤に死す。年五十六。佛鑑法性護國院と號す。【一二】

間宮林藏　茨田郡次

幕府分解接近時代掲出。【八三】

一に松田軍次ともいふ。河内茨田郡門眞三番村百姓、天保元年白井孝右衛門の紹介にて大盥平八郎の門に入る。兵亂の後一度鄉里に歸り瀨田濟之助の一族を和州路に逃がしやり、自らは領主役場に自首し出で罪にあふ。【六三】

ミ

水野忠邦

幼字於菟五郎、忠光の第二子。寛政六年六月廿三日江戸西久保藩邸に生れ、文化九年五月家を嗣ぐ。文政元年幕府に請ふて肥前唐津より遠江濱松に移り、八年五月大阪城代となる。九年十一月京都所司代に轉じ、十一年西丸老中となり、天保五年三月本丸老中となる。同十二年將軍家齊薨ずるに及び家慶を輔けて鋭意治を圖り、所謂天保改革を行ふ。然れども其政治餘りに峻嚴なりとて諸士の怨を買ひ十三年閏九月職を免ぜらる。

水野忠友　水野忠成

弘化元年六月再起ぜられて老中となりしが權勢また昔日の如からず。六年二月職を免ぜられ、九月加恩一萬石、本地一萬石を減ぜられ蟄居を命ぜらる。四年二月免さる。この月病みて死す。【三、一六、四二】

田沼時代掲出。【一】

忠友の養子。文化十四年八月西丸側用人より老中格となされ、文政元年八月老中となる。是より幕府財政の彌縫策をなし、大に將軍の寵を得權勢一時に振ふ。天保五年三月死。【一、三、六、九、二八、二九】

美間順藏

名は茂親、如柳と號す。阿波那賀郡羽浦町岩脇の人、寛政七年生る。初め京都に學び後長崎に移り蘭學を學び、又天文を習ふ。シーボルトの來るや是に就きて學び、鳴瀧塾最初の教師となる。最も學に熱心にして後來大に嘱望せられたりしが、惜いかな。文政八年六月コレラを病みて死す。年三十一。長崎市寺町大晉寺に葬る。【八二】

メ

明正天皇

御名は興子。後水尾天皇第二皇女。御母は東福門院德川和子。秀忠の女。元和九年十一月降誕。寛永六年十月内親王となり、十一月後水尾天皇の禪を受けて踐祚、七年九月即位す。在位十四年、二十年十月位を後光明天皇に讓る。元祿九年十一月崩ず。壽七十四。京都下京今熊野町の月輪陵に葬る。【一】

モ

最上德内

幕府分解接近時代掲出。【八四】

【ヤ行】

ヤ

屋代忠至

後忠位と改む。實は朝倉平十郎宣季が長男。正保四年生る。寛文三年屋代忠興の嗣となり遺領を嗣ぎ安房北條一萬石を領す。その年十二月從五位下越中守に叙任し、元祿五年二月百人組の長となり、六年八月大番頭に轉ず。正德元年職を辭す。二年七月領民公訴の事により封を沒し逼塞せしめられ、改めて廩米三千俵を賜はり寄合に列す。その十月逼塞を許さる。三年十一月致仕し、四年二月死す。年六十八。【二一】

梁川星巖

名は孟緯、字は公圖。星巖は其號なり。美濃安八郡中川村曾根稻津長考の子。十五歲家を義弟仲建に讓り、江戸に遊學し、古賀精里、山本北山に學ぶ。最も詩學に長ず。佐久間象山等と親交あり、詩壇の盟を結び、兼て時事を談ず。後に京都鴨川畔に移り居り、志を皇室に存し外警起りてよりは弘く天下の志士を會し國事を議し尊攘倒幕の說を唱ふ。安政の末年閣老間部詮勝の入京に際し、慨嘆二十五首を賦し之を諷諫す。又水戸に密勅を賜ふの事に座し幕府に捕へられんとし俄に病に罹りて死す。時に安政五年九月、年七十。明治二十四年正四位を贈らる。【二四】

矢部定謙

通稱彦五郎。父の後を嗣ぎ千五百石を賜はり兩番より火盜改役となる。天保二年先手加番より堺奉行に移る。四年七月大阪町奉行となり、七年九月勘定奉行勝手方となる。九年二月西丸留守居に移り、十二年四月小普請組支配より町奉行に任ず。同年十二月事により職を免じ差控命ぜられ、十三年三月松平和之邊に預けられ桑名に禁錮せらる。遂に憤悒し食を絕つて死す。年五十四。【三八、四二、四三、四五、七〇、七三】

山縣大貳

寶曆明和、田沼時代、松平定信時代、雄藩儒揭出。【四〇】

山口泉處

名は直亮、夫堂と號す。嘉永六年試に經科に應じ賞賜せらる。安政三年甲府徽典館を督し、小姓組番士を以て昌平黌の教授となる。其後陸軍奉行、町奉行等に任ぜられ、從五位下に叙せらる。駿河守と稱す。明治維新後權少教正に補せられ、二十八年十二月東照宮祠堂に終る。時に年六十六。【二〇】

ユ

湯川幹

大鹽門下の一人。字は用譽、大學刮目點者の一人なり。【五四】

ヨ

吉雄幸載

名は種通、諸熊惟一の子にして吉雄幸載種德の後を嗣ぐ。文化十四年長崎施療藥外科醫に任じ、學塾を創設し諸生を教授し、シーボルトの來朝するや我が家を是に提供し公私周旋するところ多し。文政十二年隱居し、慶應二年二月病みて死す。時に年七十九。【八一、八二】

吉雄忠次郎

名は永宜、字は永民、吳洲と號す。夙に蘭學に通じ、馬場佐十郎の後を承けて天文臺譯方となる。後之を退き長崎に歸りシーボルトの譯を手傳ひ、高橋、シーボルトの間に立ち周旋すること多し。後獄の件に

座し、米澤上杉氏に預けられ、天保四年二月山形に死す。墓は山形西運寺にあり。著書駱駝考、諸厄利亞人性情志等あり。【八三、八四、八六、九一】

吉見英太郎　九郎右衛門の子。天保二年三月十歳にして大鹽平八郎の門に入る。平八郎の兵を起すに先だち、父九郎右衛門密訴の功により銀五十枚を賜はる。【四四】

吉見九郎右衛門　大阪東組同心、本姓は林氏。後吉見氏を嗣ぐ。文政十一年三十八歳にして大鹽の門に入りしが、中途にして志を變じ密訴し出で、其功により御譜代席小普請入とせらる。【三四、三六、四五、四八、五一、五二】

米倉倬次郎　大阪玉造口與力、嘗つて大鹽門下に入りたることあり。兵亂には與からず。【六〇、六一】

米津伊勢守　名は政懿、出羽村山郡長瀞藩主、一萬二千石を食む。天保四年三月より大阪青屋口加番たり。【五八、六二】

【ラ行】

ラ

賴山陽　松平定信時代、幕府分解接近時代、雄藩竄揚出、【一、三三、三四、四一】

【ワ行】

ワ

王陽明　名は守仁、字は伯安、明の成化八年餘姚に生る。少より豪邁不羈、任俠を以て自ら居る。弘治十二年進士に及第し、翌年始めて仕官す。十八年侯臣劉瑾等を劾し、貴州龍陽驛丞に左遷せらる。是より知行合一の旨を發し正學に復す。後正德五年召されて江西廬陵縣の知事となる。是より官途益進み弟子亦多し。十一年都察院左僉都御使に進み、南贛、汀、漳等の巡撫に拜す。嘉靖七年死。年五十七。著書傳習錄、詩文集等あり。【二六】

脇坂安董　後、中務大輔と稱す。播磨龍野藩主。人となり聰敏、機略あり。將軍家齊に知られ二十數歳の頃擢んでられて奏者番兼寺社奉行となり、當時惡弊重積せる佛教の徒の罪惡を摘發し天下の耳目をして聳動せしむ。然れども事により官を辭し屏居すること多年、天保六年仙石氏の事起るに及び再起せられて寺社奉行となり、よく其獄を斷じて誤るなし。天保七年二月西丸老中格となり、九月老中となる。八年七月本丸老中となる。十二年二月死。年六十餘。【一四、一五、一六、二〇】

渡邊登　名は定靜、字は子安、又伯登、華山、隨安居士等と號す。田原侯三宅氏の臣、寛政五年九月江戸の藩邸に生る。壯にして儒を佐藤一齋に、繪畫を平山文鏡、宋紫山、金子金陵、谷文晁等に學び、文化十一年納戸役となる。父の歿後家を繼ぎ、八十石を食み、文政九年番頭となり、尋で側用人に轉じ、天保三年五月更に家老職となり祿百石を加へられ二十石の役料を賜はる。是より意を民事に注ぎ、補翼するところ多し。又常に外警に注意し高野長英等を延きて蘭學を講ぜしめしが、後事を以て幕府の誅忌に觸れ、天保十年二月鄉國に囚禁せら

る。ついで十二年十月自盡す。年四十九。【九六、一〇〇】

渡邊良左衞門　大阪東組同心、大鹽の亂に與みし、後逃れて河内志紀郡田井中村に自殺す。【三四、四八、六三、六四】

索引

【ア行】

ア

朝倉左右兵……五九
亞細亞洲……四六九
亞細亞諸島……四七一
安房……一〇四、二七七、二七八
安房郡……一〇三
粟崎……五〇四
淡路町……二七八、二九一、二九八、三〇三
會津……四三三
アフタ……四二八
近江……一九三
油掛町……三〇七、三二一、三三四、三四〇
亞弗利加……四六九
アフリカ洲……四七三
尼崎……二九九、三〇一
尼崎城……二九八
亞墨利加……四六九
アメリカ……四七五、四七六
厦門……四三五、四三六
有馬澤……一〇八
青屋口……二八八、二九九
諳厄利亞國……四二七、四三四、四三九、四八七
アンゲリヤ國……四二九
諳厄利亞人……四四一
諳厄利亞船……四三八

イ、井

暎咭利……三八〇
英吉利斯……四七〇、四七一
イギリス……二六七、四七二、四七五、四七六、四七八
英吉利斯龍動……四六八

伊勢……一八
伊勢白子……四三五
伊勢神廟文庫……一九〇
伊勢津……一八八
伊勢山田……三五七
伊須把尼亞……四八九、四九一
伊豆國大島……四三一
伊豆下田……五〇六
伊丹……一五八、二三六
和泉橋……一〇九
岩城……一〇四
今橋……二七二、二七八
イワヤゴーランテヤ……四二九
インギリス……四五一
インス……四二六

ウ

浮本……三九六

内平野町……二七八、二八〇
内骨屋町筋……二九〇
鳥都加……四九七
靱下通二丁目……三〇六
梅田……一九二
浦賀……三七七、三七八、三八〇、四三〇、四三一、四三五、四三五、四三六、四三八、四三九、四四〇
浦賀灣……四七二、四七九
ウルツプ……四二二、四二七
ウユルツブルグ……三九〇
ウルツプ……四二二、四二七
雲南……四三五、四四五

エ、ヱ

英國……四四一
エゲレス……四二五
エゲレス人……四二四
江刺郡……一〇八
蝦夷……四〇三、四〇四、四〇九
越中……五一一
江戸……三七、一〇九、一二四、一八九、一九八、一九九、二一三、二一六、二〇一、二五一、二七七、二九六、四〇三、四一〇、四二二、四三三、四四〇、四六八、四七八、四八四
江戸入海……三七七
江戸小石川……二一〇
江戸本石町……三九六
江戸深川……四〇七
江戸港……三七七
エトモ……四二七、四二八、四二九
エトロフ……四二二、四二七、五〇三、五〇六
江戸灣……四三一
エンゲレス……四四八
エンゲレシュ……四二九
エンデルモ港(繪鞆)……四二七

オ、ヲ

牡鹿……一〇八
岡崎城……二〇
岡山……一九三
烏斯答羅利亞……四六九
亞斯太羅利……四七一
小田原……四三九、四四〇
大洗山……四四〇
大瓶……一〇四
大阪……三七、一一七、一二三、一二七、一五〇、一八九、一九二、一九五、一九六、二一一、二二三、二二四、二二五、二二六、二二八、二五八、二六一、二六二、二六八、二八〇、二八八、三〇〇、三〇一、三〇三、三二三、三二四、三二六、三二九、三四四、三四六、三四九、三九七
大阪天滿……一一九、一二一
大阪天滿川崎四軒坊……一二二
大阪油掛町……三〇五
大島……四三四
大津內留岡……四四六
大津村……四四三
大津濱……四四五
オホツク海……四三一

大手……二九九
大手筋……二七八
大手門……二九九
大傳馬町……三二、四〇
大原……一〇四
大村……三九六
クラッカ……四三四
阿蘭陀……三八〇
和蘭……五〇〇
オロシヤ……三六七、四二八、四三四

【カ行】

カ

高麗橋……二七七、二七八
高麗稲筋谷町……三六四
鯛茲町……三四、三九
加賀……五一
鹿兒島……四六六
鹿兒島灣……四六三
上總……三七四
上總三黑村……六八
勝沼宿……一一
金澤……五〇九
加那拿……四七一
金吹町……三一、四〇
金谷村……三七八
川越……四三九、四四〇
川崎……一一三、一八九、一九二、二八八
河内……三〇五
河内國志紀郡田井中村……三〇五
河内國高安郡恩知村……三〇五
瓦屋町……二九一
甲山……二〇九、二一一、三一一
河北潟……五〇九
加美郡……一〇八
上屋敷……二八六

上町……二九八
龜岡……三〇一
樺太……四〇三
カラフト……三〇二、四一七
唐津……一二
カリホルニヤ……四七三
カルクツト……三八一、三八二
咬噶吧……四六〇
雁木坂……二八〇、二九九
神田佐久間町……一一三
神田旅籠町……三五
廣東……四五三、四五五、四六八、四七七
カントン……四二九

キ

紀州熊野浦……四二七
岸和田……一三七、二九九、三〇一
木曾路……一八
北野……一九一
北山筋……一一
北亞墨利加……四七〇、四七三
京都……二〇、三七、一五七、一五八、一六八、二二三、二三六、三九六
京二條新地……一五八
京橋口……二九九
京橋組……二八九
京橋四丁目……三一〇

ク

クイン・シヤルロット島……四五一
郡上……一〇四
クナシリ……四一七
久里濱沖……四三一
熊本……一三三
熊野堂村……一一
觀音崎……三七八、四三三、四三九
關西……一七〇

關東……一八八

コ

古河……三一六
黑龍江……三九七、四〇三
郡山……二九九、三〇一
亘厚……一二一
亘摩郡……一二一
コロンビヤ……四五〇

【サ行】

サ

堺……一八
堺筋淡路町……二一七
薩哈嗹……三九七
佐倉……一〇三
櫻橋筋……一九二
篠山……三〇一
薩摩國寶島……四四七、四六八
サンガル海峽……三九七
三州刈屋……二〇
桑港……三〇六、三一七

シ

思案橋……二七八、二九〇
七條奎師屋町……一〇八
支那……四五八、四八一
西伯利……四七〇
島原……三九六
下辻村……二九一
下寺町……三〇四
下總……三一七
下和田……一一〇
汐留……九七
樂英島……一八九
暹羅……四三五、四四七、四七五
爪哇……三九〇
上海……四五五
白川……四三二、四三九
白濱村……四三一
新和蘭陀……四七三

ス

吹田……二九九
筋違橋……一〇九
駿河町……三〇、三四、三〇

セ

瀨戸內海……一三六
仙臺……一〇八
仙臺芭蕉の辻……一〇八
千日前……一六一
船場上町……二八七

ソ

宗谷海峽……四〇三
曾根崎……一九一
粗山村……六〇

【タ行】

タ

大聖寺……二三
臺灣……四二三
堂島……一八九
堂島裏町……一九一
高崎城……四三一
高槻城……二九九
高槻藩……三〇〇
高山……一〇四
寶島沖……四四七
濃の口村……四三一
雛組……四八一

館林……二三
田所町……二四、四〇
棚倉……五七、四〇五
棚倉城……一二
玉造……二〇〇
玉造口……二八〇、二八二、二九九

チ

千島……四〇九

ツ

塚崎……二九六
津輕海峽……二九七
豆州冢本村……二三三
津山……二三
都留郡……一一〇、一二
鶴瀬宿……一一

テ

銚子……四三一
朝鮮……四七七
朝鮮半島……五〇六
出島……二九一
出羽國前崎……五〇六
寺町筋……三〇五
天笠……四三四、四七六、四八一、五〇〇
天神橋……二八八、三〇三
天保山……一九九
天滿……一三三、一三八、一六一、一九二、二八〇、二八四、三〇三、三六一
天滿今井町……二一八
天滿橋……二五七、二八三、二八七
天滿樽屋橋……一九九
天滿橋筋長柄町……一三三
天王寺……一六二、一九九
天王寺飛田……三三四

東京……四二五
富田……一六二
富山……二三
都兒格……四八七、四九五

【ナ行】

ナ

中古屋……二八〇
中郡邊……一一
長崎……二六七、二八一、二九五、二九六、四〇〇、四一七、四二一、四二八、四四八
長崎湊……四三五
中仙道……二二
中船場……二九八
中津……二九七
那珂港……四四〇
長岡藩……一〇五
名古屋……二九六

浪華……一七五
奈良……一八
鳴瀧……二九四
難波……一八九
南部……一〇七、四二八

ニ

西印度……四七五
西の宮……二五八
新潟……一〇四
日本……四一七
寧波……四五二

ヌ

沼津……一八
沼津城……一五

ノ

能登……五二

【ハ行】

ハ

馬關海峽……三九七
函館……四二八
バタビヤ……四〇〇
八軒屋……三〇四、三一〇
八王子……一一三
ハドソン灣……四五〇
濱田……五七、五八
濱松城……一一三
ハラシーヤ……四二九
播州……一九九
バンタン……四三一、四三五
般若寺村……三三三
番場……二〇〇

ヒ

東横堀……三〇三、三〇四
東横堀町……二七七、二七八
彦根……二六四、二九二
尾州小川……二一〇
備前……一九九
飛驒……一〇四
常陸……三二一、三二七
常陸大津濱……四四二
備中……一九九
姫路……二〇一
兵庫西出町……三三三
平戸……四二一
平野……三一六
平野橋……二七八、二八〇、二九一
平根山……四三八、四三九
平根山臺場……四三三

比律賓……四五〇
備後福山……二一〇

フ

深川小名木澤……一三
福州……四五五
福島眞砂橋……一九九
武州日光街道……一〇四
富士山……三九七
伏見……一八、一二三、一六五
二瀨……三九六
富津……四三八
ブラジリイ國……四三三
ブレイタン……三〇六
豐後町……二一八

ヘ

ペルガラ……四二八
百爾西亞……四六九
傍瓦剌……三八一

ホ

房州洲之崎……四四四
ボストン……四二八
樸斯東國……四六〇
堀留町一丁目……三一、四〇
波爾杜瓦爾……四八九
ホルトガル國……四二、四三、四六
本革屋町……二一〇
香港……四五六
本町一丁目……二一〇
本町五丁目……三二三
本兩替町……三四、四〇

【マ行】

マ

澳門……四三〇
桜前……一〇六、四二六、四二七、四二八、四三〇
松本……一八、二〇
松屋筋……二九〇
間宮の瀬戸……二九七

ミ

三馬屋……一〇六
三河町一丁目……三五
水木濱……四四七
水戸……四四〇、四四一
水戸濱……四四一
南亞墨利加……四七二
南本町二丁目……二一六
宮腰浦……四四〇、四四一
宮村……一〇四

ム

陸奥……三七一
室町一丁目……四〇
室町三丁目……三一

メ

靈是可……四八六

モ

濠鏡澳……四八八
モゴル……四三四
莫臥兒……四九四
桃生……一〇六
盛岡……一〇四
守口……一九九

【ヤ行】

ヤ

八百屋町筋……二九一
雅克薩……四八九
八代……一一一
山里丸……二八〇、二九九
山田……一五〇
大和……三〇五
大和路……三四〇
山梨……一一一
谷村……一一一

ヨ

横磯……四四〇
吉田……六、九、一〇
四ツ橋……三〇四
淀……二九九、三〇一

【ラ行】

ロ

魯西亞……三〇一、三六〇、四八一、四八四
露西亞……四〇六
鄂羅斯……四二〇、四二一
俄羅斯……四八六、四八七、四八九
ロッキー……四四四
ロンドン……四四一

【ワ行】

ワ

渡邊村……一四四

昭和三年三月七日印刷
昭和三年三月十日發行

不許複製

近世日本國民史 文政天保時代 並製奥付
金貳圓五拾錢

著者 德富猪一郎
發行兼印刷者 東京市京橋區日吉町 渡邊爲藏
印刷所 東京市京橋區日吉町 民友社
發行所 東京市京橋區日吉町 民友社
振替口座東一三一〇〇

民友社出版圖書目錄

東京市京橋區日吉町
振替東京一三一〇〇

蘇峰　德富猪一郎著

近世日本國民史

特色本領の一二

◆歴史講究熱勃興　當今の社會に歴史講究熱が、蓊然として興つて來たのは、邦家前途の爲め慶賀に堪へぬ。これは『近世日本國民史』の刺戟の力、與つて大に居るとは、朝野識者が萬口一辭の批判である。

◆獨闘創造の歴史　近世日本國民史は、其の材料の精確詳審であるのみならず、成る可く前人の功を沒せざる爲めに其の史實を採用するのみならず、其の歴史的人物、若くは人物に關係ある權威者をして自ら語らしめてある。國民史は著者の獨闘であり、創造である。

◆胸中の一大樓閣　著者は胸中に一大樓閣ありて、其の資料に古人を使用する筆、この偉大なる國民史は、著者の匠心獨造である。而してこの大建築は、實に大正昭和の御代を象徴す可き一大偉觀であるのみならず、帝國文献の有する驥古の一大産物である。

◆特色は綜合大觀　一室には一室の用があり、一階には一階の用がある。然も其の特色は、之を綜合大觀せねばならぬ。蘇峰先生の國民史、亦如此耳。併し國民史を以て、單に世の所謂る歴史と同一視するは、大なる間違だ。歴史は歴史だが、從來の歴史とは、全く其の本領、面目、趣向を異にしてゐる。

◆時代潮流の活描　それは著者は一方に人を見、一方に勢を見。一方に心を見、一方に肉を見、一方に思想を見、一方に生活を見。而して兩者が社會を經緯して、時代の潮流に從て動く情態を描き且つ叙し、且つ論ずるからである。これ從來の史書に見る能はざる特徴の一だ。

◆秩序的百科字彙　されば國民史は、近世日本のあらゆる寶庫だ。政治でも、經濟でも、文學でも、宗教でも、美術でも、哲學でも、農業でも、商業でも、工業でも、世の中の森羅萬象、殆ど悉く其の大綱大要を囊括して漏らす所がない。されば國民史を以て、秩序的の近世日本百科字彙と云ふも妨げまい。

近世日本國民史

(1) 織田氏時代 前篇	本篇は近世日本國民史の最源頭をなすもので、筆を室町幕府の末期に起し、其の衰亡に止む。眞に信長の霸業創始時代の記錄也。	
(2) 織田氏時代 中篇	本篇は信長が、鋭意努力の時代を叙述したるもので、長篠戦爭を始め、安土城の經營、毛利氏との關係、丹波方面の手入れ等に至る。	
(3) 織田氏時代 後篇	本篇は信長が最活動最得意の時代を叙述したもので、武田氏の滅亡、信長父子の死等を描き、最後に信長の全體を顯現したるもの。	
(4) 豐臣氏時代 甲篇	本篇は秀吉の素生出身に筆を起し、後織田氏時代に接續して、秀吉の創業時代を叙述したもので、一代の英雄秀吉の立志傳なり。	
(5) 豐臣氏時代 乙篇	本篇は秀吉が五十一歳から、五十三歳に至る最も油の乘りたる期間の記錄で、秀吉の生涯中最得意の時代である。	
(6) 豐臣氏時代 丙篇	本篇は秀吉時代の落著を示し、北條氏退治を骨子として、東北の平定、家康の移封の他に、我使節の羅馬入りに及ぶ。	
(7) 豐臣氏時代丁篇 朝鮮役 上卷	本篇は著者が最も精力を傾注し、大和民族の海外葛藤より、秀吉の外征、行長の平壌入り、其他日本軍制海權の失墜に終る。	

上製　菊判　定價各五圓　送料各十八錢
並製　四六判　定價各三圓　送料各十二錢

近世日本國民史

(8) 豐臣氏時代戊篇 朝鮮役 中卷

本篇は朝鮮役に於ける日明外交史にして、朝鮮が明の救援を請ふに始まり、明の神宗皇帝が秀吉を日本國王に封ずるに終る。

(9) 豐臣氏時代己篇 朝鮮役 下卷

本篇は朝鮮役の總勘定にして、講和評定の經緯より秀吉の死と日本軍の總撤退に至り、關白秀次の破滅秀頼の成立を叙す。

(10) 豐臣氏時代庚篇 桃山時代概觀

本篇は日本歴史に磨滅すべからざる華麗絢爛たる文化の一時期を劃した、桃山時代の多趣多樣、各種各方面に亙る特色、概觀を描く。

(11) 家康時代上卷 關原役

本篇は秀吉死後の形勢より、關原一戰に於て石田三成が家康と雌雄を決せんとして、如何に震天動地の活劇を演じたかを叙す。

(12) 家康時代中卷 大阪役

本篇は天下の名實德川氏に歸し、遂に大阪冬陣夏陣の開始となり大阪城陷り豐臣氏全く亡ぶるの狀を叙したる哀史なり。

(13) 家康時代下卷 家康時代概觀

本篇は家康の人物と、其の一生の事功とを精密に叙述したもので、德川幕府施政の根本義に始り、家康の臨終に至るまでを記述す。

(14) 德川幕府上期上卷 鎖國篇

本篇は鎖國政策に關聯した內外一切の出來事を、豐富なる材料と精嚴なる史筆とに因りて叙述したもので、島原役の顚末等をも記述す。

上製 菊判 定價 各五圓 送料 各十八錢
並製 四六判 定價 各三圓 送料 各十二錢

近世日本國民史

(15) 德川幕府上期中卷 統制篇

本篇は、幕府對朝廷關係の記述で、朝幕衝突を始め、諸大名改易、親藩連枝處置の顚末の如き、最も幕府の醍醐を抉出す。

(16) 德川幕府上期下卷 思想篇

本篇は京王及び國體の思想の胚胎と、發達の來歴を記述し、殊に水戸光圀に關しては特筆大書し、由比正雪事件に及ぶ。

(17) 元祿時代上卷 政治篇

本篇は幕府の政治を記述すると共に、綱吉公、桂昌院、堀田、柳澤等の人物を批判し、時の後光明天皇の御事をも記載す。

(18) 元祿時代中卷 義士篇

本篇は赤穗義擧事件の記述で、單に興味中心を目的とせず、其の原因を究め、世論を批判し獨特の觀察の下に成る眞の義士觀なり。

(19) 元祿時代下卷 世相篇

本篇は元祿時代各方面の代表的人物と、業蹟を記し、瑞賢、奈良茂、辰五郎等の實業家や、西鶴、近松、芭蕉、狩野、英、等を擧ぐ。

(20) 元祿享保中間時代

本篇は家宣、家繼時代に、新井白石が如何に活躍したかを精叙し、羅馬人シドッチの渡來、江島事件等を特筆して概觀に及ぶ。

(21) 吉宗時代

本篇は將軍政治中興の一時期たる吉宗時代の施設萬般を縱橫に叙述し、吉宗の人物は勿論、更に文敎發達の方面をも特筆した。

上製 菊判 定價 各五圓 送料 各十八錢 (上製)價五、〇〇 送一、八〇
並製 四六判 定價 各三圓 送料 各十二錢 (並製)價二、五〇 送一、二〇

近世日本國民史

(22) 寶暦明和篇
本篇は桃園天皇を中心としたる、攝家對平ら公家の葛藤、竹内式部、山縣大貳の二大事件を詳述し、幕府倒壞の因を說く。

(23) 田沼時代
本篇は田沼時代に向つて嚴正なる批判を下し、田沼意次の人物を詳細に解剖し、蘭學興隆を物語り、上杉鷹山の劇的場面に及ぶ。

(24) 松平定信時代
本篇は時の老中松平定信を中心として當時の諸相を評述批判し、就中光格天皇の尊號宣下事件を解剖論評した點本書特獨。

(25) 幕府分解接近時代
本書は德川十一代將軍家齊時代、幕府の崩壞する勢を解き、外國船の接近に國防論尊王攘夷論の湧出を述べる。

(26) 雄藩篇
本書は德川末期に於ける諸藩の形勢を論じ、殊に薩摩、長州、水戸の三大雄藩を論評す、蓋し此の三雄藩は維新に最も活躍せるもの。

(27) 文政天保時代
三月上旬刊行

(28) 天保改革篇
續刊

上製 菊判 定價 各五圓 ● 送料 各十八錢
並製 四六判 定價 各二圓五十錢 ● 送料各十二錢

紀元節發刊

二月十一日は日本帝國建立の日だ。此の日出度き日に本叢書を發刊する。蓋し、本叢書は蘇峰學人の最近十數年に於ける文筆生活を代表する金字塔である。紀元節に第一册「皇室と國民」第二册「名山遊記」を出版し爾後毎月一册の割合にて續刊する。その種目は天然、政治、文學、宗教、美術、風俗、その他凡そ人間生活に關れるもの總てに亘つてゐる。本叢書は正に大正、昭和の日本を表象する活時代史である。

蘇峰叢書

四六判二五〇頁内外
毎册定價五拾錢
送料毎册八錢

第一册 皇室と國民
第二册 名山遊記
第三册 國民と政治
三月發賣

西郷南洲先生
財團法人 青山會館編纂
本書は維新後傑中、現代に於ても最も一般民衆に欽慕さるゝ西郷南洲先生の人物とその事業とを論評せしものなり。
四六判 定價六拾錢 送料四錢

大久保甲東先生
蘇峰 德富猪一郎著
本書は維新の偉傑甲東先生に對する世人の誤解を一掃し、先生の眞の力量、手腕、人物及びその事業とを評論す。
四六版五百餘頁 定價貳圓 送料十二錢

南洲先生遺墨集
一卷を開かば天晴の大人豪の風丰眼前に躍出し、無限の大教訓を享受し得べく現下風敎興德の源泉である。
百三十點 定價拾五圓 送料一圓

甲東先生遺墨集
本集は南洲先生遺墨集と共に日月の如く并び懸けて青史を照破し、四海忠義の心を振起するの一大寶訓なるを疑はず。
百六十點 定價拾五圓 送料一圓

蘇峰 德富猪一郎 著

國民小訓
天覽台覽・久邇大宮殿下より本書嘉稱の玉詠漢詩御下賜
附錄＝涵情養氣集
忠君愛國の護符、壹政敎養の絕好讀本、眞に國民醒覺の敎訓書。附錄に和歌八十首、漢詩九十絕を收む。孰れも國民の志氣を振作するの隨一書籍。日夕諷誦の絕好伴侶。
（文部省認定）
菊判並製 二四〇頁 定價八拾錢 送料八錢

縮刷國民小訓
改訂（文部省認定）
「國民小訓」愛讀者諸氏の熱誠なる御要求に應じ、携帶に便にして而かも醇酒なる縮刷版。
四六判 定價五拾錢 送料六錢

家庭小訓
改訂（文部省認定）
家庭に於ける實用的心得を示したもので家庭や女學校に備ふべき書。
菊判並製 定價五拾錢 送料六錢

處世小訓
改訂（文部省認定）
如何にして世に處すべきかを平易に說いたもので、實に出世の好指針。
菊判並製 定價五拾錢 送料六錢

昭和一新論
本書は「國民小訓」の姉妹篇として昭和御代劈頭に著はされし物。過現來を達觀しよく宇內の趨勢を洞察しての立言なり。
菊判 定價六拾錢 送料八錢

民友社編輯部編纂

國民小訓字解
家庭小訓字解
處世小訓字解
何れも出來るだけ精確丁寧に字解を附し、著者述作の精神の諒解に努む。
定價參拾錢 送料四錢
定價貳拾五錢 送料二錢
定價貳拾五錢 送料二錢

蘇峰 德富猪一郎 著

大正の青年と帝國の前途
日本帝國の使命遂行と、國民の覺悟とに就て、大正の青年の精神元氣を、鼓舞作興した國運興隆の指針盤。
三六判上製 定價貳圓 送料十二錢

時務一家言 改版
蘇峰先生の思想經綸の大經大綱を說示した書で、其生命を打込み、熱血を注ぎたる述作言論の精粹。
四六判上製 定價貳圓 送料十二錢

大和民族の醒覺
日米問題に關して、蘇峰先生が幾多の醒覺を力說された警告書で、同胞諸君の自奮を促がす必讀書。
四六判上製 定價貳圓 送料十錢

三十七八年役と外交
日本國民の血を湧かした、三十七八年役の外交機密が、當時輿論に參與した著者が公平に批判し、赤裸に暴露した世界的奇書。
四六判上製 定價壹圓 送料八錢

精神の復興 蘇峰文抜萃
如何にして國民的精神を興隆し、實力を養成すべきかを啓示した、愛國的熱誠の溢れたる精神復興の指針。
四六判並製 定價貳圓五拾錢 送料十二錢

政界の革新
清浦內閣を中心として一世を震駭したもので政界の革新を絕叫した活文字。
菊判 定價五拾錢 送料四錢

吉田松陰 改版
維新改革時代の代表的人物たる松陰の眞傳として、唯一なる獨特の權威を有す。青年諸君の一讀を待つ。
四六判上製 寫眞筆跡入 定價貳圓五拾錢 送料十二錢

靜思餘錄 改版
蘇峰先生の廿五歲より卅二歲に至る時代の精神的結晶品で、最も用筆の韻致に富み興不盡の名著。
三六判上製 定價貳圓 送料八錢

烟霞勝遊記 還曆記念出版 上卷 下卷（品切）
蘇峰先生の興味饒き勝遊の產、多彩なる名勝記、又胸底湧出の印象記で、足跡北海道より滿鮮に達る。感興不盡、紀行文の隨一、旅行の好伴侶。
風景人物寫眞一百餘入 定價參圓五拾錢 送料十二錢

蘇峰　德富猪一郎著

蘇峰隨筆

先生の學問、識見、趣味、修養、好尚、即ち全人格が最も鮮明に發揮せられたもの。自然、人事、群籍、思索の隨感隨錄、風趣橫溢。

概れ震災後の起稿で、從つて記述眞劍味多く、讀者の感興を惹くこと深し。其の執れにも先生獨特の觀察識見あり。隨筆の絕好。

四六判上製　四〇頁　定價貳圓五拾錢　送料十錢

第二蘇峰隨筆

獨特の眼孔筆致を以て、東西古今の人物を捉へ來りて、能く其の眞を傳ふ。著者が『書くことを禁じ得ざる刹那に於て書いた』ところに本書の眞價がある。

四六判上製　四〇頁　定價貳圓五拾錢　送料十錢

第一人物隨錄

本書は蘇峰先生が湘南逗子の野史亭に於て、修史の餘課產み出したる隨感隨筆六十記述の題目內容の豐富なる、四題を敢む。其の精明淨潔なる、讀者叩くに從ひて、大小の響之れに應ずるの妙がある。

四六判上製　高雅本　定價十貳圓　送料十錢

野史亭獨語

賴山陽

賴山陽は著者幼少の頃から、愛好傾倒した人物の一人だ。本書は三十餘年の間博搜した資料と研究した識見とを以て、大處より大觀したる力作。山陽の全面目躍如。

四六判上製　四〇頁　定價四圓八拾錢　送料十錢

賴山陽書翰集（上下）

本書は弘く江湖の所藏を探求して得たるものを、嚴密なる考證研究の下に、年代順に分類編纂したるもの。自ら山陽自叙傳を大成したる空前の產物。

菊判上製　一八〇〇頁　定價拾八圓五十四錢　送料

幕府衰亡論（改版）

本書は幕府衰亡の因由、歸結を詳論して、必讀の價値ある名著。觀察正鵠、意見公正、論斷穩當、而して平明、淡泊、然も情と理と勞と揣摩して要領を得たるところ無比。著者は世界を家として、足跡渾球に普し。本書は南北中米十二ケ國、三萬七千餘哩の視察歷遊の記。山川風物を活寫し、海外發展國策の經綸を絕說する快著。

菊判地圖寫眞十數葉入　定價參圓五拾錢　送料十八錢

西半球を巡りて

井上雅二著　蘇峰學人序

故櫻痴居士　爾地源一郎著　蘇峰學人序

德富猪一郎　木崎愛吉　光吉元次郎　共編

大谷光瑞師著

新刊

無題錄

第一編、第二編、第三編

第一、第二編各價八拾錢　第三編價八拾五錢　送料（各）二錢

極樂莊嚴

新鸞上人の胸中燦たる光明に滿つ極樂の莊嚴を科學的に表現したるものは即ち本書である。

四六判　定價貳圓　送料八錢

濯足堂漫筆

師一流の獨特の紀行感想隨筆等を收むること廿有餘篇、何れも多彩豐潤、津々たる興味盡きざる新集を見よ。

四六判　定價貳圓　送料十錢

孫子新註

孫子の本領は外交經世の眞髓を說くにある。是れを有して國家榮え、是れを讀みて國民昂る。蓋し人生の好指針である。

三六版　定價壹圓　送料六錢

佛說阿彌陀經講話

西方淨土の本願は此の經典より流出す。本書は光瑞貌下の詳釋本にして、その博學と懇切とは正に賢師慈父の感あり。

四六判　定價壹圓　送料六錢

般若心經講話

光瑞師の多年の研究に依て成れる書。其の該博の蘊蓄を傾倒した後完成されたものだけに、渾然之を融一してゐる。

四六判　定價七拾五錢　送料四錢

佛教の原理

本書は師が博大なる科學的智識を傾倒し佛教の原理を解釋闡明したもので、一讀以て其の深甚微妙の眞理に到達す。

四六判　定價壹圓五拾錢　送料六錢

第一義諦

本書は光瑞師の著書中に於て最も光彩陸離たるものにして、玄圃を極めたる佛教の眞諦を說く獅子吼なり。

四六判　定價壹圓貳拾錢　送料六錢

見眞大師

本書は大師の裔孫たる光瑞師が大師の信仰と人格とを詳述されたるものにして、大師の面目躍如たるものがある。

菊判和製　定價參圓　送料十二錢

國民パンフレット

國民新聞編輯局編

國政	普通選擧早わかり	普通選擧の内容を平易に、親切に說明したもので參考資料をも收めた類書中の覇王なり。	小形美本 定價參拾錢 送料二錢
國民新聞編輯局編	普選ポスターと新戰術	現代はポスターの時代なり。ポスターは直接簡。明なる武器。本書は各國と我國各政黨のポスターと普選常識手引を備ふ。	四六判 定價四拾錢 送料六錢
國民新聞編輯局編	地方普選早わかり ―府縣會議員選擧の心得―	本書は府縣會議員普選の常識、及びそれに必要なる法文を收めしものと普選ポスター「と新戰術」の姉妹篇。	四六判 定價參拾錢 送料四錢
國民新聞經濟部編	街頭經濟	本書は日常誰人でも見聞する物に就て平易に經濟的立場より詳述する。例へば「虫寶り」「花寶り」「ブロカーガー」の如し。	四六判 定價五拾錢 送料四錢
伊藤龜雄著	歐洲の獨裁政治	本書は近來我國に現はれ、殊に普選後は興味の中心ともなるべき無産政黨の生立を述べしもの。近代人必讀の書なり。	各 四六判 定價壹圓 送料六錢
井口一郎著	我國の無産政黨	地租委讓問題は財政經濟上の問題たるのみならず、今や我國政治問題中にても重要なる問題となつた。本書は朝野を代表する二氏の論戰なり。	各 四六判 定價壹圓 送料六錢
	地租委讓問題論戰 ―武藤金吉、菅原通敬兩氏―		
公爵 近衛文麿述	貴族院改革と現制度の運用	今や貴族院は參々事業と離れ行く感あり。この時に當り甲冑の新人近衛文麿公の貴重なる叫びや、眞にわが意を得たものでなければならぬ。	各 四六判 定價壹圓 送料八錢
經濟學博士 阿部賢一著	生活問題と經濟思想	本書は難かしい經濟學を斯くも平易に斯く迄も丁寧に述べたるもの。實に世人の生活を洞察せる博士の優しき指導書である。	四六判 定價六拾錢 送料四錢

蘆花 德富健次郎著

改版	自然と人生	萬人の胸に徹する魅力ある本書は、實に現今に至るまで、其の需要は出版界の記錄を破る。精彩ある自然と人生のスケッチを見よ。	菊半截並製 定價六拾錢 送料四錢
改版 小說	不如歸	讀書界の親戚を集めた本書は、津々浦々にまで知られた武男と、浪子を中心とした悲愴な物語で、何人も一度は手にすべき不朽の名篇。	三六裝美本 定價壹圓 送料八錢
改版 小說	思出の記	著者の初期の傑作で、主人公の幼時よりの運命の曲折と、生存の惱みと、無愛の歡喜と、結婚の幸福を描いた長編小說。	四六判美本 定價壹圓 送料六錢
改版	名婦鑑	本書を一度繙けば世界古今の名婦を一堂に集めて相語るの思ひがある。古の名婦の跡をたづね現今の名婦の事業と人物を知るは女性そのものゝ眞價を知ることである。	四六判並製 定價六拾錢 送料四錢

農村問題四名著

農學博士 小野武夫著	村の辻を往く	本書は各方面より見たる農村生活の改善等を實際の例を擧げて、極めて面白く平易に論述したる近來の快著。	四六判並製 定價六拾錢 送料四錢
農學博士 中島九郎述	現時の農村問題	米國問題、小作爭議、農村生活の改善等、其他農村に於ける現代の政治、經濟、社會上多くの問題を實際より研究した良書。	四六判美本 定價壹圓 送料八錢
フォート博士原著 水野常吉譯	丁抹の農村と其の教育	世界的唯一の模範たる丁抹の農村と教育とを說ける農村問題解決の鍵にして、國富增進の典型を明示したる利用厚生の好指針。	四六判並製 定價八拾錢 送料六錢
フォート博士述	農村問題講演	斯界の世界的權威者たる博士が、先年來朝の際、我が農村問題の解決に一大刺戟を與へられたる農村及び教育問題の講演集。	四六判並製 定價八拾錢 送料六錢

正岡子規監修

新俳句

明治類題の句集で、題目の豐富、句數の多饒なることを特色とせる斯界の眞書。子規居士の監修に高き識見を覗ふべし。

四六判美本　定價壹圓　送料八錢

國民教育會編

現代文化と教育

故厨川博士、深田博士、阿部帝大教授、菅原博士、上野帝大講師、澤柳博士、入澤帝大教授等の文化教育の講演集にして、絶好の必讀書。

四六判　定價壹圓五拾錢　送料八錢

師範大學講座第一輯

修身科

本會新設講座の第一回講演筆記である。理論と實際の兩方面から說いた修身科の研究。教育者諸君補習用の絶好書。

菊判二三八頁　定價八拾錢　送料八錢

師範大學講座第二輯

宗教科

神教、佛教、基督教、儒教即ち世界四大宗教の眞髓を四大家が最も短的、而かも平易に叙したるもの。今まで求めて得られざり し書。

菊判三〇〇頁　定價壹圓　送料八錢

文學博士　澤柳政太郎編

現代教育の警鐘

本書は我國唯一の實際教育の研究學校たる所の成城小學校の苦心經營と十ケ年努力とを披瀝せしもの。天下教育改造の警鐘である。

菊判　定價壹圓八拾錢　送料十二錢

英國バイウオーター原著　堀敏一譯述

日米關係未來記

太平洋戰爭

日米將來の謎を解き、且つ語る稀有の快書にして、日米の將來を知らんと欲するものは是非一讀あれ。

四六判　定價六拾錢　送料壹圓

下位春吉述

ファッショ運動

伊太利國民運動に參加した著者の講演筆記で愛國運動振りが如何に躍如たるかを見よ。

菊判　定價五拾錢　送料四錢

鶴友會編

齋藤實傳

大倉鶴彥翁

實業界の大立物として、一世の快男兒たる翁が、裸一貫から今日の大成功をした絶好の立志篇。

菊判天金上製　定價參圓五拾錢　送料八錢

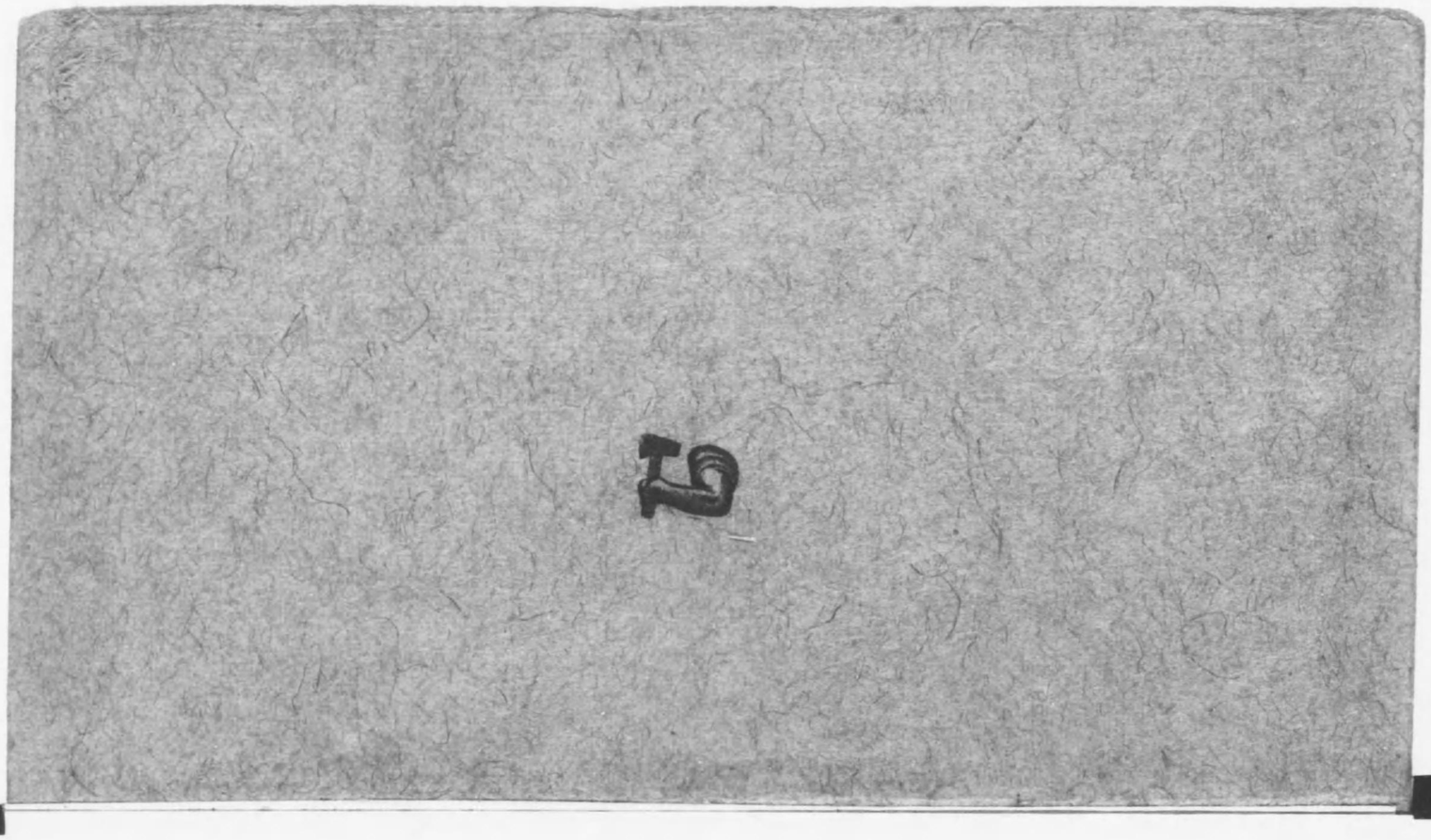
駒澤裁縫學院長　坂井光子

家庭向物尺型紙いらず　坂井式洋服裁縫

（小供婦人服の巻）

一讀すれば直ぐ小供服婦人服が誰れにでも出來る重寶な書

菊判美本　定價貳圓五拾錢　送料十二錢



384
43

終